イギリスの教育(7)

ハロースクールの教育

チャールス・ヴォーンの改革

目次

まえがき……15
一　ハロー校に招かる……15
二　ヴォーンの勉学時代……16
　ラグビー校　トリニティ・カレッジ
　アーノルドとの交信書翰
三　教育改革の方向……19
　就任第一業績　六年生を招く
　良教師を招く　改革の重点
四　教育の目的　理想のイギリス人……21
　イギリス国教会員　紳士的行動
　幅広い知的教養
五　教育の内容　何を教えるか……22
六　教育の組織……23
　適正なる学校規模　学級編成
　進級　職員組織
七　入学　寮教師を選ぶ……26
八　個人指導教師……27
　個人指導教師の学習指導
　個人指導教師の生徒指導
　起源　長所と短所
九　校長の学習指導……31
　ヴォーンの授業
一〇　寮の教育的意義……33
　イギリスの寮制中等学校
　ハロー校の寮の発達　寮教師、校長の社会的地位
　聖職位　校長助教師の報酬
一一　道徳・宗教教育……40
　宗教的人間の形成　監督生徒
　当番下級生　宗教観
一二　施設の改善充実……46
一三　辞任　聖職者養成事業に入る……47
　注……53
　あとがき……57

図表

第1表　日英学校一覧……48
第2表　学級編成表……48
第3表　六年上級（校長学級）生徒の実態……49
第4表　校長の週授業計画表……50
第5表　古典助教師の週授業計画表……51
第6表　新創立学校一覧……52
第7表　校長教師の聖職位保持者数……53
第8表　寮生個人指導生徒数……53
第9表　七大校一覧表……53

ハロースクールの教育
チャールス・ヴォーンの改革

池田良三

まえがき

前号「ハロースクールの教育法」（イギリスの教育(6)）では、学校の創立と維持の基礎となる、勅許状を中心に述べた。今回は創立から凡そ二百年後の、チャールス・ヴォーン（一八四四―五九在職）の教育改革について述べる。

従来慈善施設として細々と経営されていた学校も、次第にその重要性が認められ、一八世紀の中頃から生徒が急増する。同時に学生の反抗事件、乱暴事件も急増している。ハロー校の沿革史に記録されているのは、一七五七年寮生間の集団暴行事件にはじまり、一七七一年管理委員への反抗事件、一八〇五年にはバトラー校長任命に反対する校長室爆破事件（未遂）、その二年後には校長の監督生徒の権限縮小計画に反対し、校長室の椅子を破壊してストライキ宣言をした。ロンドロ街道にバリケードを築いて反抗した。三五〇名もいた生徒は、この事件で二五〇名になっていた。生徒はこの後も減少し、ヴォーンが就任する一八四四年には、最低の六九名となっていた。

ヴォーンはハロー校の教育に大改革を加えた。生徒数は年々倍加した。三年後には四倍の三一四名、退職する一五年後には七倍の四八八名となっていた。彼の教育改革の重点などこにあったのか。多数の両親たちがその子どもを、ヴォーン校長のいるハロー校におくったのは、どのような理由からか。この点を明らかにするのが、この第7集の目的である。ハロー校教育の中心となる、校長・個人指導教師の週授業計画表とその指導振り、特に宗教教育に重点をおき、校長・助教師に聖職位をもつ者を多数採用する教育方針等、具体的資料に基づいて解明したいと考えている。彼の教育改革の跡を明らかにする資料の一つは、彼がハローを去った直後の一八六一年実施された、イギリス議会の学校調査報告書である。当時の学校管理、学校経営全般に関する評細な資料が、全部収録されている。現在のイギリスの中等教育は、百年前のこの時代の教育方法のうち、教育課程の一部の改善、即最高の六年級に選択教科を大幅に採用している点のみである。その意味でヴォーンの教育は、重大な教育改革と考えてよいと思う。この小論がその目的を達しているかどうか、諸賢各位のご批正の言葉を承ることが出来れば幸に存じます。

一　ハロー校に招かる

管理委員会の課題―校長を求む

バトラー校長（一八〇五―二九在職）就任の頃三五〇名いた生徒は、一八〇八年の反抗事件後主謀者は追放され、生徒数は二五八名となった。〔注1〕次のロングレー校長（一八二九―三六在職）は涙もろく、生徒を十分罰することが出来ず、次のワーズワース校長（一八三六―四四在職）は企画は出来るが、その計画を強力にすすめるだけの実践力がなかった。〔注2〕一八四四年には最悪の状態となった。校長寮は廃止されたまま、三寮に六九名残されている。彼等は毎日の

ように学校を抜け出し、隣り町の居酒屋に入りびたり、ハローの町でも投石騒ぎや非行を重ねている。ハローの往民たちの不満の声は管理委員の耳にもしきりに届く。管理委員会は学校の再建について真剣に協議し、彼等の目は期せずしてラグビー校の、トーマス・アーノルド校長（一八二八―四二在職中急死）の名声に集中していた。

ラグビー校出身、二八才の若いチャールス・ヴォーン校長（一八四四―五九）が実現するには、以上のような背景があった。

彼は着任早々後で述べるように、生徒の飲酒をぴたりと止めさせ「ガイ・ホークスの夜」の野蛮な行事（一六〇五年一一月五日ローマ・カトリック弾圧法に反対する勢力は、ジェームズ一世と議会を一挙に爆破しようとして、爆破計画をすすめた。これは未遂に終ったが、この日を記念して、張本人のわら人形に花火を仕掛け、これに火をつける奇風がはじまった〔注3〕を中止させた。その代りとして、彼は監督生徒たちを校長の食卓に招待することとした。ヴォーン校長就任以来、生徒数は倍加した。今生徒数の変化のみを記してみる。

一八四四年七月	七九名（最低は六九名）
一八四五年九月	一一七名
一八四六年九月	二二一名
一八四七年九月	三一四名
一八四八年九月	三四二名
一八四九年四月	三六一名
一八五〇年九月	三八一名
一八五九年四月	四八八名〔注4〕

さて、彼の教育改革事業を考える前に、彼の勉学時代から述べることが順序であろう。

二　ヴォーンの勉学時代

1　誕　生

ヴォーンは一八一六年、レスターのセント・マーティン教会代理牧師エドワード・ヴォーンの第二子として生れた。幼年時代から父に教えられていたが、彼が一三才の年、父は不幸にも急死した。彼は直ちにラグビー校におくられることになった。

2　ラグビー校入学

彼がラグビー校に入学したのは、トーマス・アーノルド（一八二八―四二在職）が校長として赴任した第二年目であった。アーノルドのラグビー校教育方式が着々実施され、一歩々々前進している、生気はつらつとした時代である。彼は直ちに頭角を現わし、校長に近い秘蔵弟子群の一人となった。

ラグビー校の教育

当時のラグビー校生徒数は、月謝無料の将学生が凡そ四〇名（全員通学生）、その他は自費生で、全部で二百名を少し越していた筈である。〔注5〕その頃各学校では学生の反抗事件、乱暴事件が続発し、学校は悪の巣窟として社会の批判が集中していた。アーノルドは学校教育に次のような大改革を施し、ラグビー校をイギリス一流の学校に育て上げた（小著「イギリス教育の伝統と未来」を参照されたい）。

彼は教育目的として、

道徳的宗教的情操豊かな人間

紳士的思考行動のとれる人間
知的能力向上につとめる人間
の三ケ条を掲げ、この目標達成の方法として
(1) 生徒は寮教師を選んで入学し、卒業まで同一の「寮」で生活する
(2) 生徒は古典教師を「個人指導教師」として選び、学習上、生活上全般の指導を受ける
(3) 道徳訓練の目的で最上級生を監督生徒に任命し、下級生の保護監督に当らせる
(4) 宗教教育は教育の基本である、堅信礼の準備として礼拝堂中心の教育を実施する
(5) スポーツを計画的に採用し、余暇の活用に努力する
(6) 生徒数は最高三〇〇名とする（それ以上は責任もって教育できない）
(7) 若い良教師を高給で招く（そのために個人指導教師への月謝を新設している）

以上の教育方法は、現在もそのままイギリスの「私立中等学校（パブリック・スクール）」で採用されている。現在は教育課程がちがっているだけである。ヴォーンはラグビー校に六年間在学した。

3 トリニティ・カレッジ（ケンブリッジ）

次に彼はこの大学に進んだが、ここでも常に優秀な成績を発揮し、ラグビー校の名声を高めている。在学中は優秀賞、卒業に際しては古典優等試験で首席を占め、一八三八年総長金賞を受けている。彼は翌年「特別研究員（フェロー）」となり、一時法律の研究にすすむが、恩師の忠告を受けてすぐ神学の研究にもどり、聖職位を受け、兄の仕事を助けるために故郷の教会に勤めることとなった。彼はラグビーを出てからも絶えず恩師アーノルドと交信している。次にその一部を紹介したい。

彼はスタンレー本寺長（ラグビー時代の親友、アーノルド伝の編著者）の妹メアリーと結婚した。〔注6〕

4 アーノルドとの交信書翰

ここにヴォーンの精神的成長のあとを辿り得る、貴重な文献がある。それはアーノルドの教え子、後のウェストミンスター本寺長スタンレー編著の「アーノルド博士の生涯と書翰集」〔注7〕に収められている、ヴォーン宛の九通の手紙である。今その発信年月日、中心課題、両者の反応の要点を抄訳する。

第一信（一八三五年二月二五日付）

読書への忠告「君の親切な手紙をもらいながら返事が後れましたが、私が忘れていたのだと思ってもらっては困ります。……君が大学のやり方にまだなじめないということについて、その有様をまざまざと思い浮べることが出来ないのをもどかしく思っています。オックスフォードの学生生活ならばそうでもないのですが。」（アーノルドはオックスフォードのコープス・クリスティ・カレッジの出身―著者）さらに続けて、ギリシア語の詩を読むこと、ドイツ語を確実に収得せよ、外国語の収得は自分の武器を増すことだよと、勉学上の忠告を与えている。〔注8〕

第二信（一八三五年九月九日付）

ハッチ君の病状「……（療養中の）ハッチ君の病状について、ジェフソン医師はよくなると確信もっていわれるが、見た所どうも思わしくないようです。……彼は健康な頃は全く素直なよい学生だった。……

…彼は君のケンブリッジ便りを聞きたがっていることだろう。……私は六年級にプラトーンのパイドン篇（霊魂の不滅について）を読みはじめた所です。……」〔注9〕

第三信（一八三六年三月七日付）

償等賞への祝辞「私は金曜日の夜君の母上に祝辞を書きました。君の親切な手紙、ほんとうに有難う。君が優秀な成績をとってくれて、私はどんなに喜こんだらよいのだろうか、ほんとうに君に感謝します。……六月になったらラグビーに来てくれるそうだが、私の家内も子ども達も、君の成功に大喜こびだよ。」〔注10〕

第四信（一八三七年九月一三日付

職業選択について（略）

第五信（一八三八年三月四日付）

卒業試験最優秀賞への祝辞、「君が卒業試験での大成功について、私は心からの祝辞を君に捧げます。君が最優等第一位に、一人ではなく、リットルトン卿と二人括孤内に入っているというが（この年は優秀で一位が二名である）、悔むことはありません。……君はこれで人生への出発準備を終り、今後の生活を真剣に考うべき時にきました。ヴォーン君よ、これから始まりその終りを知らない真の人生において、われらが常に神とともに歩けますように。……」〔注11〕

第六信（一八四〇年一一月四日付）

法津家か聖職者か、「君の手紙は深い関心を与えたので、私は慎しみ深い言い方はしたくない。法律を職業としたいという誘惑から、救い出された人のことをよく考えてみることは、実に関心深いことである。君は法律の研究に入ろうとしている。

私が君のために悲しんでいると、言うことは実につらい。それ故私は君が法律から離れ、絶粋なキリスト教徒としての職業（calling〔注12〕が使用されている、数行前の職業はprofessionが使用されている）の何れかえ、大いに役立っ方向に進むなら大変嬉しいと思っている。……君は他の職業を選んだ方が君の個性に合うと思っている。君の高い能力は法律では発揮出来ないと思っている。……返事をくれ給え、こちらに来てもらってもよい。……」〔注13〕

第七信（一八四〇年一一月一六日付）

ラグビー校助教師へ誘う、「私の返事で強い意見を述べたので、君が疑問に思っているのではないかと心配している。……君の大学生活も終った。君の法律研究は――君のいう法律研究は、今漸く始まったばかりだと思う。それは（法津研究）君の神学研究に及ばないことは確実である。それ故準備という点のみにっいていえば、君は法律よりも教会の牧師職が最適である。……私は今のところラグビーを去る意志はもっていない。それ故君が教師として、ラグビーに来てくれるならば、それこそ私の最大の喜こびとなるであろう。……」〔注14〕

第八信（一八四〇年一二月四日付）

職業の変更、「小册子を送ってもらって有り難う。このような道徳的改革運動は、人間がその生涯中で楽しみ得る、純粋の喜こびとなるものである。また君が職業の変更を決定したと聞いて、ほんとうに嬉しさが一杯である。願わくは神よ、君の心に永遠の恵みを垂れ給わんことを。」〔注15〕

第九信（一八四〇年一二月二八日付）

宣誓について神学上の見解を述べている〔注16〕以下略。

尚この「アーノルド伝」には三〇二通余の手紙が収めてある。友人コレリッジ判事宛のもの四〇通が最高、教え子ではスタンレー宛一二

通が最高である。

5　ラグビー校長候補となる

一八四二年六月、恩師アーノルド博士はラグビー校在職中、心臓発作のため急死した。四七才であった。ラグビー校後任校長候補の中に、ヴォーンも入っていた。二六才である。この時はテート博士が選任されている。この人は後にカンタベリー大僧正となっている。所がこの二年後、ヴォーンはハロー校に招かれることになった。

三、教育改革の方向

1、就任第一業績―飲酒の禁止

ヴォーン博士がハロー校に着任した頃、当時六年生に在学していたラウンデル氏は、その回想記の一節に次のように書いている。「ヴォーンのハローでの、最初の経験は、驚きの連続であった。ハロー教区代理牧師は、ハロー校管理委員の一人であるが、真剣に新校長に忠告した。現在残っている六九名を全員追放しなさい、さらに本気で勉強したいと申し出る者だけ受容れなさい」と。ヴォーンはこの忠告を彼の常識と良識で退け、その上ワーズワース前校長時代の監督生徒をそのまま承認し、かえって校風刷新に協力するよう仕向けたのである。ラウンデルは当時の学校の模様についても述べている。当時寮としては、パーク寮、オクズナム氏寮、ドルーリー氏寮の三寮のみであった。最後まで残っていた「寮母寮（ダームズ・ハウス）」（サムナー校長一七六〇―七一年時代、学校関係者以外の者が経営していた寮をやめさせ、校長監督下の寮母（ダーム）に経営させていた寮）〔注17〕は、一八四一年の暮閉鎖され、グローブ寮はヴォーン博士到着直前閉鎖されたばかりであった。校長寮はワーズワース校長時代焼失し、その後廃止されたままになっていた。G・バトラー校長時代増築された校舎を除けば、一八四四年の外観は、後に首相となったサー・ロバート・ピール（一七八八―一八五〇）、詩人のバイロン卿在学時代そのままであった。「ずっと昔使用された教科書が、ワーズワース校長時代までそのまま使用されているなどおかしなことである。」〔注18〕と述べている。

こんな沈滞の極にある学校に赴任した、青年校長ヴォーンにとってその腕を振う絶好の機会であった。

ヴォーンの後任校長となったM・バトラー博士（一八五九―八五在職、ジョージ・バトラー校長の第二子、後にトリニティ学寮長となる）も、「ヴォーンの前に提供された機会は特別なものであった。その機会に対する彼の反応の仕方も特別なものであった。またこの機会に立向う彼の性格も特別なものであった」〔注19〕と評している。地域住民も、生徒たちも、ヴォーンが背負ってきた名声をよく知っていた。それだけ彼の就任に大きな期待をかけていた。一つには、あのアーノルド校長秘蔵の門下生であるということ（スタンレー編著のアーノルド伝は一八四四年発売され、各方面に深い感銘を与えていた。）二つには、ケンブリッジ大学における彼の業績は、彼が当代第一流の古典学者であるということである。彼の個人的魅力についても大きな期待があった。彼の身長は中位以下であったが、誰も背が低かったと表現した者はいない。少年たちは校長が、やさしさのうちにも威厳のある姿で、校長寮から学校へ向って丘を登って行くのを見る時、彼等は直観的に校長を最高権威者と感じとっていた。

このような内外からの期待の中に飛びこんできたヴォーンは、法律の研究に興味をもつ程の緻密な計画性と実践力、その上に若い力を十

分に発揮して、かって学んだラグビー校のあの新鮮な生気を、このハローに蘇がえらせようと決意した。先づ彼が生徒たちに求めたことは、悪習からの脱却である。

飲酒の禁止である。

彼は着任早々全生徒を講堂に集め、平明な言葉で次のように話しはじめた。飲酒は学校の校規に決められた禁止事項である。然るにこの禁を犯す者がいる。私は改めて禁止すると宣言する。この悪習を止めさせる為に、私はあらゆる方法をとるつもりである。そのために今後は、いつでも、どこでも、どんなことをしてでも、その証拠を見つけだし、見つけ次第直ちに放校処分とする、と申し渡した。そしてぴたりと止めさせることに成功した。〔注20〕

2、六年生を招く

彼の改革のすすめ方については、ラウンデル氏と同じ当時六年生の記事に、次のように書いている。「私がハロー校の生徒であったのは五〇年も前のことであるが、そこで過した四年間のことはまざまざと憶い起すことができる。私は新校長ヴォーン博士着任の際の興奮を記憶している。……私はその頃最高の六年級の生徒になったばかりであった。彼の経営のすすめ方は、彼等（六年級生徒）が学校を支配し、学校を良くするための最高議会を構成するよう（監督生徒の会議）先づ六年級生徒と友人となることであった。そこで彼はわれらを校長の食卓に招いてくれた。これは大変気持のよいものであった。」〔注21〕

3、良教師を招く

生徒たちは一応は新校長の宣言を尊重するであろう。しかし教師側に少しでも隙を見つけると、直ちに旧弊に走り易い。良い秩序を永い年月維持するものは、そも何であろうか。ハロー校の沿革史を書いたE・D・ラボードは、ヴォーンについて、彼は「臨機応変の才能をもち、動作は魅力にみち、第一級の古典学者、能力の高い学校管理者、しかもこれという衝突を起すこともなく、学校内の規律・風紀を維持することに成功した。……彼が校長として成功した最も大きな秘訣は、一つは彼のもとに人材を集めることができたことによる。その中でも著名な者は、待にダラム僧正となったウェストコット、後にマールバラ・カレッジ校長、カンタベリー本寺長となったファーラー、レプトン校長となったピーアズ、ヘーリーベリー・カレッジ校長となったブラッドビー等である。」〔注22〕

この素晴しい助教師たちの強力な指導組織、ヴォーン自身の統制力、さらに校長の創立者ジョン・ライアンの遺志を盛りこむ奨学生増員の努力、地元民の要望する商業学校の創立等、ハロー校の黄金時代を約束する要因は全部揃ってきた。

4、改革の重点

ヴォーンの教育改革の重点はどこにおかれていたのか、その概要を最初に述べる。

第一に、校長寮の再開である。管理委員会は前校長時代校長寮を廃止し、寮生を持たせないことを決議していたが、彼は着任早々この決議の撤廃を求め、その承認を得て後、校長住宅に一棟増築して校長寮とした。

第二に、教育の第一歩は生徒の精神的安定にあるとし、生徒指導体系の完成に努力した。寮経営の改善（小寮の追加増設）、個人指導教師制度、監督生徒制度、進級方法、学級編成を教科によってかえるなど、生徒指導と学習指導を一体化する方向への改善である。

第三に、個人指導教師制度を決定し、生徒は入学から卒業までこの教師のもとで、学習上、生活上の指導を受けることとした。

第四に、学級は教科により、その目的によって自由に編成するようにした。凡そ三〇名、一〇名～一五名、一名の三段階とし、学習指導の徹底を期した。

第五に、若い優秀な助教師を高給で雇った。

第六に、一六才の堅信礼準備（コンファーメーション）に全教師努力した。ヴォーンの宗教観は広教会派（ブロードチャーチ）に属し、多数国民の支持を受けていた。

第七に、礼拝堂の拡張工事に私費を投じ、クリミア戦で没した卒業生二二名のため記念の回廊を増築した。

第八に、地元ハローの町から通学する、月謝無料の奨学生を増し（三六名）、創立者の遺志を生かした。

第九に、教育施設の教育的価値を重視し、軍人志望学級の新設、射撃クラブの新設、水泳場、運動場の拡張、虚弱者救済のための小寮の建設等は彼の独創である。

最後に、地元民の要望する商業学校を、彼の私費で新設している。これは中等教育の新しい方向を示すものであった。

四、教育の目的　理想のイギリス人

ジョン・ロック（一六三二―一七〇四）は「教育に関する考察」で、イギリス人の理想とする紳士養成上の注意を述べている。彼が生きた一七世紀は、イギリスでも最も波乱に富んだ時代であった。絶対主義王政の時代から急転して、ピューリタン革命（一六四二年）による共和政治、国王不在の一一年間、この行き過ぎからやがて王政の時代（一六六〇年）へと、目まぐるしく移っていった。このイギリス社会を内部から動かし、既存の秩序を存続しようとする勢力と争いながら、新しい社会秩序を生みだそうとしているのが、中産階級に属する商工業者である。彼等は、社会的身分ではジェントリーと呼ばれた。

ロック家は祖父の代までは商工業者であったが、父は法律を学んで弁護士となった。母の実家は製革業者であった。父も母も篤信なピューリタンだったので、ロックはこの頃の中流家庭に典型的なピューリタニズムの、清潔で厳粛な雰囲気の中で育っている。彼はその著書の中で「紳士なら誰しも自分の息子に残す財産以外に、息子のために望むものは、徳（ヴァーチュー）、分別（ウィズダム）、育ち（ブリーディング）、知識（ラーニング）の四つに含まれています」と述べている。彼はこの四つのうち徳を、一人前の男、紳士の天賦のうち第一の、最も必要なものと考えている。この徳の基礎として早目に、子供の心に真の神の観念が植付けられていなくてはならぬという。そして「神とは独立至上の存在であり、万物の創造者、制作者で、われわれにすべての善を授け、われわれを愛し、またわれわれにあらゆるものを授けるもので、その結果としてこの至上存在に対する愛と崇教を子供の心に浸み込ませなければならぬ」という。

無限の存在の納得しにくいことはすておき、ただ「神が万物を作り、支配すること、神は一切の物のいうことを聞き、万物を見ること、また神を愛し、神に従う者には、神はあらゆる善をなす」〔注23〕と繰返し諄々と述べている。実際の方法としては「主の祈り、〔注24〕信仰箇条、十誡〔注26〕は、子供が完全に暗記する必要があります。しかし入門書で、自分で読むことによるのではなく、字が読める前に、誰かが繰返し子供に読んでやって覚えるのがよいと思います」〔注27〕と述べている。イギリス国教会はこのような信者によって支えられていた。

しかし、人々が生産行為、或は商行為にのみ熱中し、その子の宗教

教育に消極的となる時代を迎えると、先に述べたように一八世紀から一九世紀にかけて、学生の反抗事件、乱暴事件が続発することとなる。ハロー校にとっては最悪の時代に着任した、ヴォーン校長は如何なる人間像を描きながら、彼の教育をすすめていったであろうか。

1、イギリス国教会会員

バトラー校長はハロー校の報告書の最後に、この学校の生徒たちを「大人になったらイギリス国教会の有用な一員たるべき少年」〔注28〕に育てると述べている。この目的を達成するために校長以下全職員が、聖職位をもつ校長以下一一名（専任二二名のうち）が中心となって、生徒たちに一六才で堅信礼を受けさせるための準備教育をやっている。学校の年間行事、週行事及び日々の行事は、宗教教育が中心となっている。礼拝堂では毎日朝食後、日曜日は八・三〇、一一・〇〇、一八・三〇の三回礼拝が行われ、聖書講義は日曜日（一五・一五〜一六・一五）、月曜日（七・三〇〜九・〇〇）の二回行われている（宗教教育の項参照のこと。）堅信礼前には特別教育が実施されている。

学校教育の最大の目的は、ハロー校においてはイギリス国教会の良き信者を育てることである。

2、紳士的行動

寮の生活は、寮教師とその家族を中心に、上級及び下級の生徒で構成され、最上級生は監督生徒となり、下徒生は当番下級生として、各その地位に応じてその責任を紳士的に果すよう、組織されている。この寮生活を中心にして生徒たちは、紳士に要求される資質即ち用心深さ、勇気、正義を守る心、同情心、礼儀正しさを身に体しながら行動して、人生への信念を強くしていくのである。最終的には「少年を支配する唯一の真の方法は、少年が少年自らを支配するよう訓練すること」〔注29〕だということを、少年自らに気づかせるよう仕向けていくことだという。

3、幅広い知的教養

どの職業にも必要な基礎的な、幅広い知的教養を与えることを目構としている。報告書で「私（バトラー校長）は彼（生徒）を直ちに特定の職業につくよう訓練していないし、少年が一八才か一九才でこの学校を出る時に、人生の真の学問の出発点に立つ者としか考えていない。……しかし彼がこのハロー校で熱心に勉強したのであれば、卒業の時に、順序よく考える力、仕事を確実にやりとげるという価値の意識、知識そのもの尊敬の念、文学の中に秘められている品位あり豊かな思想の正しい理解、それはまだ十分な程度とはいえないにしても、これから引き続いて研究しようという切なる願望となっている、このような能力を備えていると確信している。」〔注30〕

五、教育の内容　何を教えるか

イギリスは今や（一九世紀半ば）地球上至る所に植民地をもち、国民はどこで、どんな仕事につくか、選択の余地も大きくなった。教育内容も当然変らざるを得ない。どんな仕事につくにしても、それをやりとげる緻密な頭脳と不屈の精神力、その解決に耐え得る体力を養うに足る、教育内容である。

ハロー校の教育課程に変化が起ったのは、創立一三〇年後のサッカレー校長（一七四六―六〇）時代である。この頃から数学、フランス語、現代史を半休日（火・木・土）の午後教えるようになった。

さらに一〇〇年後のヴォーン時代には、正課としてラテン語、ギリシア語、数学、現代外国語としてフランス語、ドイツ語を教え（従って奨学生は無料である）、半休日の午後は生徒の希望により別に月謝を徴収して数学、現代外国語、図画、音楽、フェンシング等を教えていた。自然科学はまだ教科としては取上げられず、希望者に試験を実施し、優秀な者に賞を与える程度であった。

体育は季節により種目をかえ、放課後、半休日の午後実施した。しかし、古典中心の考え方は全然変っていない。

教科、指導時間数

次に最下級、中級、最上級の教科目及びその指導時間数（一八六一年）を示す。

四年三級　二一名

聖書(2)、ギリシア語(4)、ラテン語(9)、算術(2)、フランス語(1)、歴史(1)暗誦(10)、計二九時間

五年二級　三六名

聖書(2)、ギリシア語(4)、ラテン語(4)、ギリシア語、ラテン語文法作文(4)、歴史(2)、数学(3)、現代外国語(2)、暗誦(2)、計二三時間

監督生徒六年上級　三〇名

神学(2)、ギリシア語、ラテン語訳読(10)、歴史(1)、数学(3)、現代外国語(2)、暗誦(4)、計二二時間〔注31〕（この学級は校長担当の学級である。校長一週間の指導は第4表を参照されたい。）

ハロー住民の不満、実業中等学校の要求

ハローの住民はハロー校に期待し、その恩恵も受けていた。しかし不満もあった。その第一は、奨学生の数が学校経営不振に陥った一七三九年、一四名に減員されたままである。第二は、子どもの教育を目的に移住者が増しているが、まだ居住年数制限がないことである。第三は、住民の大多数を占める農工商業に従事する親達は、その子に古典教育よりも、すぐ役立つ英語・商業等を教える中等学校がほしい。これは教育内容に対する希望であり、この要求はヴォーンの業績の項で述べるように、第一、第二の要求と共に実業中等学校として実現することとなる。（初等学校については創立の頭初、初等学級がつくられ、一六六〇年初等学校（グラム・スクール）が六村落につくられ、一八六〇年には、ハロー国民学校外六校に、八一ポンド三シリングの補助が、ジョン・ライアンの寄付した財産収入から支出されていることを、既に述べた。）〔注32〕

六、教育の組織

学習指導を効果的にすゝめ、生徒たちの能力を高める方法は、凡そ二つの側面から考えねばならぬ。

第一は、教育する場の問題である。学校はどのような場所に設置したらよいか。生徒数はどれ位が適当か。一学級の生徒数は何名とするか。この数は教科によって変化させるか。生徒数と教師数の比率はどれ位が適当か、など問題は多い。

第二は、生徒と教師の問題である。生徒は当然学習意欲をもつことを前提として入学さすべきである。教師は当然教育者として必要な条件を備えているべきであるが、ハロー校においては教科担当教師、個人指導教師、寮教師の三つの名称がある。教科担当教師が教室での教科指導を徹底するために、学級編成に工夫したことは、第一の側面で述べる。個人指導教師、寮教師の任務については項を改めて述べる。

1、適正なる学校規模五〇〇名

適正なる学校規模とは、教育効果を最高に発揮し得る、学校の条件としての生徒数を指している。この数は、誰が、どこで、どんな理由のもとで決定するのか。ハロー校の調査報告書の最後に、調査委員会の正式の勧告書がついている。その一節に「われらは、学校の生徒数は決して五〇〇名を超えさすべきではないと勧告する。本校の寮生の最大数はこれに接近しているが、決して超えさせてはならない。この制限を勧告すべきであると信ずる理由については、イートン校の報告書に既に述べた通りである。〔注33〕ハロー校の生徒数はこの年（一八六一年）四六四名であった。〔34〕イートン校への勧告には「私立（パブリック）中等学校（クラースクール）の生徒数は、一人の校長が実際上ある種の個人的影響を与え得ないほど、多数になってはならない」〔注35〕とし、その数は五〇〇名を超えてはならない、それ以上となったら教師間の連絡、教師と生徒、生徒と生徒の関係は四離滅裂となり、学校としての統一がなくなる、現にイートン校にそれが見られる、と述べている。因に一八六〇年一〇月現在イートン校の生徒数は、上学年学校七一七名、下学年学校一〇一名、合計八一八名であった。〔注36〕

さて、ヴォーンの恩師、ラグビー校のトーマス・アーノルド（一八二八—四二在職）の主張は、自費生は最大限二六〇名に制限して管理委員会の承認を得、ラグビーの町から通学する月謝無料の奨学生は凡そ四〇名とし、合計三〇〇名としている。彼の出身校ウィンチェスター・カレッジは一八〇一年一六八名〔注37〕一八六一年二一六名〔注38〕で、常に二〇〇名前後におさえていた。

以上の二例は、前者は一〇〇年前、教育には素人の調査委員の眼に写った、学校の現況に対する批判である。後者は一八三〇年代、学生の反抗事件、紛争事件以後、これらの諸悪を学校から駆逐する意気ごみでラグビー校に赴任した、トーマス・アーノルドの教育実践家・教育改革家としての結論である。これらの貴重な意見は現在どう生かされているであろうか。

第1表日英学校一覧では、学校総数、一学校平均生徒数、教師一人当り生徒数を示している。イギリスの私立小学校九五名、公立中等学校約五、五〇〇校の平均五四二名、大学は三〇〇名から六〇〇名前後、前に述べた二例がすっかり定着し、常識となっていることを知ることができる。

次に日本の数字を比較してみると、小学校と中学校までは常識の域内にあると思われるが、高等学校と大学（四年制のみ）の数字は桁はずれに大きいといわざるを得ない。

2、学級編成　三〇名　一〇名　一名

ハロー校では凡そ三段階の学級を編成し、実施している。これは一つには生徒の能力によるものであり、一つには教科指導上の問題によるものである。今これを第1、第2、第3の編成と名づけておく。

第1編成

普通の編成で六年は最高三〇名、五年以下は三五名とし、学級担任は古典担当教師である。第2表参照。

第2編成

数学の学級

A、監督生徒と六年全員の六〇名、これを六の小学級（一学級は一〇名）に分割し、この学級を週三時間指導する。

B、五年級四学級一四四名を八学級とする（一学級一八名）。

C、レムーブ級とシェル一級七二名を四学級とする（一学級一八名）

以下同様に分離して一八名以下の学級とする。

現代外国語の学級

A、監督生徒と六年級六〇名を四学級とし、ドイツ語二学級、フランス語二学級とし（平均一五名）、週二時間指導する。

B、五年一級及び二級を四学級とし、ドイツ語二学級、フランス語二学級とする。以下同様にして一学級二〇名以下の学級とする。〔注39〕

第3編成

個人指導の学級

A校長の個人指導

校長は監督生徒と六年上級の古典関係全授業を担当している外に、校長付助教師を助手として一人々々の指導を行っている。校長の週授業計画は第4表を参照されたい。

B、助教師の個人指導学級における教科指導と、古典助教師による個人指導が、具体的にはどのような時間割が実施されているのか、個人指導教師の週授業計画案を示して述べることゝする（個人指導教師の項を見られたい。）

以上ハロー校の学級編成を主としてその形の上から述べてきたが、指導の目的に応じ学級の生徒を自由に変更している。古典の教室は三〇名とし、その間に個人指導の機会をおいて、個人々々の徹底度をはかり、さらに生活指導の場として生かしている。

数学と現代外国語の学級は、正確に理解させること、反復練習の機会を多くし、フランス語、ドイツ語の他の学級（指導を受けていない学級）は予習復習に余念がない。

3、進　級

進級の方法は、成績によるものと、年功によるものの二種で、その表は前者によるものが凡そ三分の二、後者は凡そ残り三分の一である。成績は次のように査定される。教科を古典（神学・歴史・地理を含む）、数学、現代外国語の三群に分け、学期中の得点を期末試験の成績に合算し、この合計点で新しく決定された学級にすゝむ。

この三群の配点は古典三、六〇〇点、数学九〇〇点、現代外国語四〇〇点とする。年功による者とは、同一学級に三学期間いた者を進級させる制度である。

期末試験

六年級の試験官には、オックスフォード又はケンブリッジ卒業の二名を招き、当校の助教師二名を補助員とし、六〇名を二週間にわたって実施している。

五年以下は各教科の教師が一週間かゝって実施している。〔注40〕

4、職員組織

(1) 常勤教師

校長		二名
助教師	古典（古典担当）	一四名
	数学	四名
	現代外国語（ドイツ語とフランス語）〔注41〕	二名
合計		二二名

非常勤教師

図工、音楽、フェンシングを半休日（火・木・土）の午後希望者に教え、学期間月謝はそれぞれ三ポンド三シリング、四ポンド、三ポンドであった。〔注42〕

(2) 教師数と生徒数

この年（一八六一年）教師数二二名、生徒数四六四名、教師一人当生徒数二一名である。ヴォーン赴任後の一八五〇年教師一五名〔注43〕、生徒三八一名〔注44〕、二五・四名である。さらに五〇年前の一八〇三年教師九名〔注45〕、生徒三五〇名〔注46〕、三九名となっている。

イートン校ではキーツ教頭（一八〇九―三四在職）時代、彼が教えた最上学級に最高一九八名もいたが、次のハートレー教頭（一八三四―五三在職）時代、助教師を増員して学級を細分化したことは、前者で述べた。〔注47〕

(3) 教師の任免

校長（ヘッド・マスター）と教頭（アンダー・マスター）は勅許状第七条〔注48〕の規定通り、管理委員会が任命している（教頭は勅許状にいう助教師である）。助教師は全部校長が校長の責任において任命している。

(4) 校長、教頭、助教師の任務

校長の任務と権限（校長の学習指導の項参照されたい）教頭は助教師中の先任者から任命される。

助教師はオックスフォドかケンブリッジの卒業生でなくてはならぬ。その任務は、

A、学級担任教師となること

B、大寮又は小寮の寮教師となること

C、個人指導教師となること

D、聖職位をもつ教師は礼拝堂で奉仕し、説教の一部を分担すること

E、学校の規則を厳重に守り、生徒に過失があれば罰し、大きな過失の場合は校長に報告する義務がある

(5) 教師の聖職位

教師は聖職位保持者が望まれている。現在二二名のうち聖職位保持者は一一名である。〔注49〕（聖職位保持者は寮教師として最適任者とされている）。

七、入学　寮教師を選ぶ

入学希望者は寮教師のもとに入学願書を提出する。入学生には地元ハローからの奨学生と、遠方から来て寮に入る自費生の二種類がある。

1、奨学生（フォンデーションナー）

ハロー教区内に住む親たちは、その子をジョン・ライアンの月謝無料の奨学生とするために、その希望を管理委員会に提出することが出来る。居住期間は関係ない。奨学生が現在受けている特典は、この学校の規定の課業（グラマー・スクール本来の目的はギリシァ語、ラテン語を教える学校である）と、数学、フランス語、ドイツ語の課業を全部無料で受けること（自費生は規定の課業の年間月謝一五ポンド、数学四ポンド、フランス語とドイツ語二ポンド五シリング支払っている）、校費五ポンドは半額免除されている。奨学生が負担しているものは、個人指導教師に年間月謝一五ポンド、入浴費七シリング、校費の半額、合計一七ポンド一七シリングである。奨学生の在学状況は、第2表に併記している。この奨学生数はL・フォード校長（一九一〇―二五在職）時代、三五名から四〇名に確定され、各寮に配置されることになった。〔注50〕

2、自費生（フォリナー）

寮教師を選び、入学願書を提出する。寮に空室ができたら、直ちに入寮入室する、これが入学である。寮教師はすべて父母が選ぶ。どの教師を選ぶかについて、もし校長の私に相談されたとしても、私はど

の寮に欠員が出来るかどうか返事するだけで、それ以上のことは返事しない、とはバトラー校長の証言である。（このことは現在も変っていない。イートン校現在の入学願書受付け方法は前著「イギリス教育の伝統と未来」の第四章に書いている。）入学は子どもにとって一大事であり、一生を左右する。教師もその一人々々が、学問もちがい、性格もちがっている。ハロー校には現在大寮が一〇、小寮が一〇あって約四五〇名収容する能力がある。大寮と小寮では、その生活がちがい（寮の教育的意義の項で述べる）、寮費もちがっている。入学するに当っては先づ、どの教師について学問するのだ、という心構えを親と子に準備させることを重視している。

3、入学年令

一三才又は一四才で入学し、一五才以上はいない、ハローの町から通学する者の中には時に一二才の者もいる。在学できる最高年令は一九才である。

4、入学試験

ギリシァ語、ラテン語の散文と詩が課される。〔注51〕

入学と同時に寮教師、個人指導教師が決定する、先づ個人指導教師から述べることゝする。

八、個人指導教師

1、個人指導教師（テューター）は古典教師

生徒は入学と同時に、特定の古典担当教師を彼の個人指導教師として選び、ハロー校在学中綿密な計画のもとに、その指導を受ける。その指導は学習上、生活上の全面にわたる。学校内では両親にかわって十二分の世話が出来るよう、生徒と接する時間にも、或は両親との関係にも、いろいろと工夫されている。大寮（寮生三〇名から四〇名の寮）の寮教師が古典担当教師の場合は、この寮に入る者は自動的にこの寮教師が個人指導教師となり、学校生活の全面において監督指導を受けることゝなる。小寮（寮生は一〇名内外）の寮教師が古典教師の場合、この寮生の外に、他の校長寮、数学教師等が経営する寮生、或は自宅から通学する生徒の、個人指導教師となる。

個人指導教師は、毎年平均六名程度の生徒を引受けているが、最高は四〇名という内規で制限されている。この制限は一人の教師の指導能力の限界ということと、その報酬が特定の個人に集中することを防ぐためである。

ハロー校では、個人指導教師への月謝は、年間一五ポンド、学校への年間月謝と同額である。〔注52〕（ラグビー校では一八六〇年、一〇ギニーの一〇ポンド一〇シリングで、この二〇年間変更されていない。〔注53〕奨学生は個人指導教師への月謝も免許されているが、現在は全員自発的に納入している。〔注54〕

校長の行う個人指導

校長は他の助教師とはちがった立場と方法で、個人指導を行っている（校長の学習指導の項参照のこと）

2、個人指導教師の学習指導

指導時間

火曜日の午前は教室での授業はなく、原則的に個人指導の日とし、午後は半休日である。その外は数学と現代外国語の時間をあてゝいる。

指導方法

六年級では、校長が選んだ教科書で週二回、一時間づつ個人別に指導を受けている。

五年級では、個人指導教師が選んだ教科書で、週一時間個人別に指導を受ける。作文は六年下級生と同様、個人指導教師の指導を受けた後に、学年の教科担当教師に提出される。

下学年学校（責任者は教頭である）に在学している者は全員、週に一時間は個人指導教師が選んだ教科書を使用する授業がある。生徒が作成する作文は、個人指導教師によって検閲され、訂正され、必要があればそれが生徒の面前で行われる。この外生徒が学校の教室で出された課題は、それが学科担任教師に提出される前に、個人指導教師の手で援助され準備されている。

学級の教科指導と、古典教師による個人指導が、具体的にはどのように実施されているのか。助教師ブラッドビーの週指導計画表（第5表）を掲げる。

E・H・ブラッドビーはレムーブ級（三六名在籍）の担当、小寮（寮生一六名）の寮教師、個人指導を担当している生徒は六年四名、五年一六名、レムーブ級以下四年級生まで含めて二〇名、合計四〇名である。（注55）彼は後にヘーリーベリー・カレッジの校長となった人である。〔注56〕彼の週指導計画表を一瞥しよう。（第5表参照）

六年級四名、月曜日木曜日の二回一時間づつホーマーを読んでいる。五年級生一六名、火曜日一回ホーマーを読んでいる。下学年学校に属するレムーブ級、シェル級、四年級に属する二〇名とは、毎日特定の時間に会い、指導している、指導内容は月曜日は作詩の訂正、火曜日は作文作詩の指導とちがっているが、この生徒たちこそ生活指導上の難問題を抱えている。

監察的態度で監視するのではなく、学習指導を主としながら監督し、必要があれば適切な指導がいっでも与えられる所に、個人指導教師制の最大特徴があると思われる。〔注57〕

次に彼の指導上の証言について見るのに、「どの学級でも生徒はその課題を学校の教室で訳する以前に、個人指導教師の前で訳するようには要求されてはいないが、個人指導教師が受持つ下学年級生徒の準備した訳を、前もって聞いておくことは慣例となっている。……私はむずかしい言葉の語尾変化や意味、時には風刺の意味の説明、訳しにくい一節にぶっかった時など、援助が必要な時だけ加勢することにしている。」〔注58〕（彼の報酬については、校長助教師の項参照のこと）

4、個人指導教師の生徒指導

生徒が在学する全期間にわたって、学習上は勿論のこと、生活と行動について、常に生徒の側に立って面倒をみるのが、個人指導教師の任務である。常に生徒に激励を与えると同時に、必要があれば寮教師と相談し、さらに校長と話し合い、生徒の両親とも面接して、生徒がハロー校に入学してきた目的を達成できるよう、努力する。

月例報告（マンスリー・レポート）

これは個人指導教師がその受持生徒の行動と学業成績について、毎月その両親に送る報告書である。その資料として、各教科担任から成績について、寮教師からは生活行動、金銭の消費状況、その他万般についての報告、これらを個人指導教師のもとで一覧表形式にまとめ、必要があればさらに彼の手で書き加えられた上、両親宛発送される。（注59）

4、個人指導教師の起源

ハロー校の個人指導教師制度は、いつ頃から採用されたのであろう

か。バトラー校長は報告書の中で、「個人指導教師制度は、ハロー校では少くとも六〇年の歴史がある。或はもっと早くからではないかと信じている」〔注60〕と述べている。その頃の校長の一人ベンジャミン・ヒース（一七七一―八五在職）は、イートン校の助教師からハロー校に赴任している。彼は一七七四年私費一千ポンドを投じ、校長宅の修理と拡張を実施し、これを校長寮とした（校長寮の建設拡張は自費生のためのものである。従って管理委員会は学校財産収入からは一文も支出していない。その理由は、ライアンの寄付財産はハローの住民の幸福のために使用さるべきであるというのである）。ヒースは翌一七七五年、彼が特別指導をしている者の中から生徒を引き抜いて、ハロー校にはじめて「六年級（シックス・フォーム）」を編成している。

ヒースはイートン校からキングズ・カレッジにすゝみ、イートン校の助教師をつとめていた。C・ホリスの「イートン校」キーツの項に、「多数の自費生（奨学生は本来の奨学生寮に生活している）は寮に寄宿していた。その自費生の寮は男の管理人（ドミニー）と寮母（ダーム）に経営されていた。

現代でいう寮教師―個人指導教師と寮教師を兼ねている―が現れたのはいつ頃のことか、それは確かめ得ない。寮制そのものと同様、寮教師（個人指導教師）も、計画もなく、またその存在も気づかれないまゝに発生したものである。一八二四年発行の「イギリス調査」によると、寮教師とは最も新しい制度であると述べているが、ヒースは助教師時代、すなわち彼がハロー校長として赴任する以前に、彼の住宅に数名の少年を宿泊させていたことは確実である。」〔注62〕ハロー校の個人指導教師制度が、ヒース校長時代に発生したものであることは、以上でほぼ確実だと思われる。

さて、何かの制度が設けられているということと、この制度がその本来の目的通り十分その機能を発揮し活用されているということは、自から別のことである。古い制度も常に新しい生命が吹きこまれなければ、生徒の糧となる生きた活動とはなり得ない。この意味でヴォーンはハロー校に赴任するや、個人指導教師制を最高度に生かす方法をとったことは、その月謝額からも推定することができる。

報告書にある個人指導教師への年間月謝は（一八六一年）、次の通りである。

イートン校　一〇ポンド一〇シリング〔注63〕
ラグビー校　一〇ポンド一〇シリング〔注64〕
ハロー校　一五ポンド

ラグビー校の個人指導教師制度は、F・テンプル校長（一八五八―六九在職、その後彼はエクゼター、ロンドン僧となり、七六才の一八九六年カンベリー大僧正となっている）〔注65〕の報告によると、一八三〇年トーマス・アーノルド校長時代採用されたものである、としている。アーノルドがこの新しい月謝を決定し、個人指導教師に生徒在学中学習・生活全般の指導を依頼する、新しい教育法を採用するには、二つのねらいがあったと思われる。

一つは、生徒の指導を徹底させ、教育来来の目的を達成することである。もう一つは、教師の優遇策である。高額の報酬を用意して、生徒の指導に全生活を打ちこめる良教師を求めることが、教育を成功させる最良の方応である、との判断である。アーノルドは、著者の前著「イギリス教育の伝統と未来」に既に述べているように、全校生徒数の最高を三〇〇名とした。生徒数の増加を押さえ、従って教師数も古典担当教師は校長とも一〇名に押さえたまゝ、しかも密度の高い徹

底した教育を望むならば、生徒の納入金を増額する外はない。しかし批判がないわけではない。イギリス中世教育史家A・F・リーチは、「ウィンチェスター・カレッジの歴史」の中で、ラグビー校はアーノルドによってすばらしい学校に育て上げられたという一般的な考え方からは、彼が月謝を増額し、学級編成を改正しながら、生徒総数を減少させたことはおかしいことである。彼は事実管理委員会の決議として、二六〇名（自費生のみ）に制限している、〔注66〕と述べている。一部には以上のような批判があったにしても、ラグビー校においては二つとも成功している。ヴォーンはハロー校にもこの成功をもたらそうと考え、個人指導教師への月謝を最高の一五ポンドに決定したと判断される。

5、個人指導教師制の長所と短所

教師と生徒との関係

個人指導教師のもとに、毎年何名かの新入生がつき、何名かの者が卒業して行く。個人指導教師とその生徒間に、個人的な緊密な関係が生れ、これは生涯続くと思われる。ヴォーンとその師アーノルドとの関係はその一例である。また各個人指導教師に対する生徒側の評価は、その父母に伝えられ、父母の友人たちにも伝えられ、世の親たちはその子の将来の寮教師、個人指導教師として印象づけられるであろう。

入学希望者の願書は、寮教師が新生児の頃から（即入学する一三年も前から）受付けていることを忘れてはならない。「チップス先生さようなら」（ジェームズ・ヒルトン著、一九三四年発行）に、コリーと名乗る生徒が三代続いて入学している。「コリー、君は……あーム……遺伝の……あーム……素晴らしい実例だ。わしは君のお祖父さんを覚えているが……あーム……お祖父さんはな、ラテン語の絶対奪格が最後まで解らずじまいだった。つまり、頭が悪かったんだな、君のお祖父さんという人は、ところが君のお父さんはな、……ま、似たり寄ったりというところだった。……」〔注67〕チップス先生はこの私立中等学校ブルックフィルド校に五〇余年も勤め、今学校の道路越しの二階に下宿して、老後の生活をおくっている。生徒側は、この学校だけが学校かのように、親も子も孫もこの学校に入学してくる。

教師は生徒に精通する

個人指導教師は担任の生徒について

第一に、その生徒の性格の特別な調査書を作成することができる

第二に、生徒を道徳宗教的、知的角度から理解している

第三に、生徒の長所短所を見つけることができる

第四に、生徒の進歩と退歩の記録を作ることができる

第五に、もし校長や他の教師に求められたならば、生徒の性格について明瞭に解明することができる。〔注68〕

教師は全教材に精通する

個人指導教師は原則として、新入生から最高学年生徒まで担当している。それ故全学年の教材に精通している必要がある。もし教師側の用意が不十分であるとしたら、教師不信の結果、個人指導を依頼する生徒が少くなることであろう。校内の教師が全員、常にどの学年の生徒へも援助の手を差しのべている姿は、全校生徒にどのような感銘を与えるであろうか。

良教師を招く　個人指導教師への月謝

教育の振興には先づ良教師が必要欠ぐべからざる要件である。さて良教師を招く条件とはどのようなものであろうか。この条件としては

二つのものが考えられる。一つは精神的な安定である。もう一つは物質的な安定である。精神的な安定については、寮の教育的意義を考える場合に述べるとして、こゝでは個人指導教師のために設けた月謝について書く。教師の優遇策として個人指導教師への月謝は、実に画期的であった。

アーノルド時代のラグビー校助教師が、各方面に進出したことは既に述べたが、ヴォーン時代ハロー校にも優秀な助教師が集っている。（校長就任の項参照のこと）。その理由は、寮教師となり個人指導教師として最高四〇名も担当すれば、最高に近い収入となるからである（校長、助教師の報酬の項参照のこと）。しかしこの生徒数は、割当てではない。生徒の自発的な申込み制であることを忘れてはならない。この自発的申込みを得る為の日常の努力は、他の何ものとも比較することは困難かと思われる。

個人指導教師制の短所

短所についてはハロー校側の文書には何も見当らない。ラグビー校のF・テンプル校長はその報告書の一節に「この制度（個人指導教師制）に何らかの欠陥があるとすれば、それは少年があまりにも援助を受け過ぎた為に、自分の学級に出てやるべき課題が、ほんとうは生徒が自分の力で解決したのではないかのように、その真実味を奪われてしもうことである。こんなことから、個人指導教師は学校の課題の準備には、生徒に絶対援助を与えてはならぬという要求となっている」〔注69〕と報告している。

九　校長の学習指導

1　校長の任務と権限

イギリスの私立中学校の、校長の任務と権限は想像以上に大きい。その中でも学習指導は最も重要な任務の一つである。そこで任務、権限の全般について述べておく必要がある。校長は全生徒の教授と訓育、礼拝堂行事の運営、全助教師の任免、寮の開設の許可権と寮生数の決定等全般について全責任をもっている。この外学校全体の財政処理の責任、校長寮の寮教師として、最高学年学級の教授一切の責任をもっている。次に毎日曜日礼拝堂の説教を受持ち、生徒の反抗事件等の大事件な全部校長の処断に持込まれる（注70）

2　校長の週授業計画

最上級生（監督生徒と六年上級三〇名）は校長が直接担当する学級である。校長は数学（三時間）、現代外国語（フランス語、ドイツ語各二時間）の外は全時間授業を担当している。（第4表参照のこと）

3　校長の個人指導

毎週定期的に生徒に出される課題は、ラテン語の散文（英語の作家の英文を約四〇行翻訳する）、ラテン語の作詩二六行、ギリシア語の詩（シェクスピアの詩をギリシア語の詩に翻訳する）の外、三週に一回は英語の作文（六〇行以上のもの）、監督生徒には別な課題が出される。これらの課題の個人指導は大変である。校長の個人指導は、上位一〇名については毎週一人一時間宛指導する。下位二〇名は四班に分け、一週一回五名宛指導する（従ってこの組は校長の指導は月一回の割である）。指導時間は主として現代外国語の時間である。

4　下学年学級の校長定例テスト

校長は数学の時間（月・水・金の三校時）、下学年級を順番に訪問し、テストを実施する。これは学期間二回を目標としている。勿論全校生徒の進歩の状況を摑むためである。

5　校長付助教師の個人指導

上位一〇名は校長の個人指導を毎週受ける、下位二〇名は毎週一回校長付助教師から個人指導を受ける（第4表助教師の作文個人指導の部）。一回一人三〇分程度の指導であるが、この個人指導による成績の向上に非常に期待をかけている。ラテン語、ギリシア語は教科書による訳語の外、作詩、作文の課題を与え、校長以下個人指導に特に努力しているが、その目的は何であろうか。それはラグビー校のアーノルド校長と同様、古典が青少年の精神形成上欠ぐべからざるものであり、知的練磨の具として青少年の世界観、社会観形成上、重要な資料とされているためである。（注71）

ここに出てくる校長付助教師の学校内の地位、助教師を去って後の社会的地位について述べることとする。（注72）

6　校長付助教師B・F・ウェストコット（一八二五―一九〇一）

彼はエドワード六世校（バーミンガム）、トリニティ・カレッジ（ケンブリッジ）で古典最優秀生、特別研究員、聖職位を受け、一八五二年ヴォーン校長に招かれハロー校助教師となった。報告書（第二巻二八五頁）のこの年は就職九年目である。校内の地位は、校長付助教師、個人指導生徒四〇名、小寮（寮生七名）を担当している。この資料から彼が受ける報酬は凡そ（推計）

校長から	一五〇ポンド
個人指導生徒四〇名（一五ポンド）	六〇〇
寮生七名（一名級三〇ポンド）	二一〇
合　計	九六〇

彼はハロー校助教師を約二〇年間勤め、一八七〇年ケンブリッジ大学欽定神学教授（ヘンリー八世創設）就任、六五才でダラム僧正となり、現職のまま没している。〔注73〕

7　ヴォーンの授業

ヴォーンの教え方は実にわかりやすく、生徒達に古典への興味をかきたてた。教え子の感想に「（校長が担当する）六年級の生徒（一八四五―五九）は、ヴォーン博士の知的で明解な教授、彼独特の同情心、彼の興味深い実のある説教を忘れることはできない。彼は物静かではあるが絶対的な練磨された力で、権威ある礼儀正しい動作の魅力と、正確で人をひきつける学問の力を統びつけていた。一連の古典教育は今よりもその範囲は狭かったとはいえ、ヴォーンの教え子たちが大学やその他の場所でかちとった非凡さは、彼がその教授に成功した証拠である。彼の純学者としてもっ訳読、作文の力は、彼の校長時代の有能な六年級生に同化され、再生産されたのである。」〔注74〕

次に、ヴォーンの教え子であり、後継者ともなったH・M・パトラー博士（一八三三―一九一八、ハロー校長は一八五九―八五在職）、後にケンブリッジのトリニティ・カレッジ学寮長一八八六―一九一八）は、ヴォーンの葬儀後最初の日曜日ランダフ聖堂の説教で、恩師の想い出に説き及び、「彼の教え方についてでありますが、彼のすばらしい学識と、まれにみる表現の明快さとは、どの授業時間においても、芸術作品の最後の仕上げをしてくれました。私は当代のすぐれた古典学者を多く知っています。それらの人々とくらべれば、博学という面では或は彼はひけをとるかと思いますが、しかし純然たる学者の

素質という面、即ギリシア、ローマの言語、特にギリシア語の考え方感じ方、言葉のほんとうの意味、それが分離しているのか連合しているのか、その抑揚等に鋭い素質をもっている点では、彼と肩を並べ得る学者は殆んどいないといってよいかと存じます。）この教授上の賜物が遺憾なく発揮された場所は、彼がわれらにギリシア語聖書の有名な、ローマ人とヘブライ人への手紙を教える時間だったと思っています。彼はこれらの大作品にまつわる疑問を提供してくれます。疑問点というのは、神学、哲学、歴史、或は宗教的儀式に関する事柄ですが、彼は一章又一章、詩篇又詩篇と連関させながら、屈曲を通して論点をあとづけながら、かくされたものを掴みだして見せながら、その間彼の指を一行一行動かして、順々に言葉の正確な使用を明らかにしつつ、彼のもっ天賦の才能を最高度に展開されたのであります。」〔注75〕

ヴォーンのこのような偉大な教授上の偉力はどこにひそんでいたのであろうか。F・D・ハウは「六大校長伝」の中で、三つあげている。

第一で最大のものは、生徒の性格を読みとる術に長じていたことである。彼は天性の外交官であった。殆んどの生徒は完全に彼の支配下に入った。彼は少年の内心をた易く読みとり、彼が希望する小路に誘いこむ術を心得ていた。

第二は、彼の同情心である。下学年時代多くの少年達は、他の助教師から教室で教わることがよくわからない。わからないのは自分にその力がないのか、いっもこんな悲痛な心境で助教師の部屋を出てくる。これらの少年たちが漸く最上級となって、ヴォーンの学級に入ってくる、個人指導を受けるようになる。校長が担当する時間は、数学と現代外国語を除く全時間である。しかしこの時間も校長と校長付助教師は個人指導をしている。数学現と代外国語は細分して一五名の学級とし、一時間は準備の自習（この自習時間に個人指導を受ける）、一時間は教師がついて学習指導をしている。六年級生となった少年たちは、自分の力のみで教科書を読んでもよくわかり、生き生きと学習することができるようになる。

自分たちの校長は、この自分をよく知り、よく気をつけてもらっているという気持に生きかえる。

第三に、偉大な教師がもっ表現できない資質である。上級生も下級生も校長に畏敬の念をもち、校長の意見の影響力は圧倒的であった。彼はめったに罰は与えなかった。教室で少年が質問され、もし知らなかったら、博士にそう言えばよかった、「お座り。」しかし少年はこんな不名誉を再び繰返そうとしなかった。

最後に、ヴォーン博士自身古典に親しまれていたことである。彼はいっも大きな辞書を教室に持ち運び、常に参照しながら教えていた。波の博識をもってしても、記憶のみではいつ誤認するかも知れないという、学問に対する態度である。これも生徒達に大きな感銘を与えた。〔注76〕

一〇、寮の教育的意義

1　イギリスの寮制中等学校

レスター・スミスは、イギリスの「私立中等学校」の特色として、

礼拝堂をもっている

広大な運動場をもっている

各独立した寮をもっている

二四時間教育を実施している

教師陣が充実している

月謝が高い

国家や地方公共団体から独立している（注77）

と述べているが、ここにいう独立という意味は、教育行政上からも、教育財政上からも独立し、独自の管理委員会をもって経営していることを意味している。

これらの学校を彼等は独立学校と呼んでいる。その学校数は第1表にある通り、二、九二四校に達している。これらの学校のうち、寮生が二〇〇名内外以上いる「寮制私立中等学校」（在学生徒の年令は一三才から一八才までを原則とする）は、T・W・バンフォドの調査によると全国（スコットランドを除く）で凡そ二〇〇校の多きに達している。〔注78〕そのうち代表的な七校の生徒数、寮生数、年間学費を示すと、第9表の通りである。

以上七校を、校名によって分類すると、

○○カレッジ　三校

○○スクール　三校

その他　一校

の三種となっている。同じ学校でありながら何故にこのような差異があるのか。

カレッジ

4　大学の中または外に法人団体化され、学問し教授するためにつくられた学者の国体

a　「通常貧乏な学生のため、大学の内に創立される独立自治の法人組織団体または協会」

b　「大学外にある同様の目的をもつ財団法人（本来の性格は老人のための養老院とか青少年の救済事業としての教育とかに関するものが多い）（オックスフォド辞典による）であって、法人団体が管理する財政の収入で、教授と学生の生活費を保障しながら、学問と教授を継続させる、本来共住共学の寮制を原則とする学問のための施設である。

スクール

1「教授する場所或はその施設」（オックスフォド辞典による）をいい、その目的によって幼児学校（インファント・スクール）（年令による）、グラマー・スクール（学問の程度による）、寮制の学校（ボーディング・スクール）（宿泊して学問をする）というように使用される。

チャーターハウス

鉱山の経営に成功し、銀行王となったトーマス・サットン（一五三二―一六一一）が、彼の私財を投じて創立した救護施設（ホスピタル）である。彼は同名の旧修道院の広大な敷地を一万三千ポンドで買いとり、次の二つの目的をもつ放護院を設立するための勅許状を、一六一一年受けている。

1　貧乏な人々を収容する養老院

2　貧乏な子ども、特に孤児を収容する無月謝学校〔注79〕

この学校はその目的からして当然、孤児を収容して宿泊食事その他一切の免倒をみる用意のある、寮制の学校である。

さて、現在は寮制をとっているこれらの学校は、その創立に当ってはそれぞれ異った目的のもとに、異った形をとっていた筈なのに、数百年後の今日殆んど同じような寮制の学校となり、イギリスの心ある父母はその子の教育に、争ってこれらの学校を選んでいる。これは一体如何なる理由からであろうか。

ハロー校の寮の発達をたどりながら、彼等が寮に与える教育的意義

について考えてみたい。

2、ハロー校の寮の発達

(1) 校長住宅　校長寮

ハロー地方の貧乏な子どもを救済する、無月謝学校として創立されたハロー・スクールには、校区外の子どものために「外来生徒（フォリナー）」（ハロー校学校事務処理規則第三条イギリスの教育(6)三八頁参照）の制度はあったが、そのための宿泊施設は考慮されていなかった。

第六代校長W・ホーン（一六六九―八五在職）時代初めて外来生徒を引受けたらしく、宿泊生徒が風邪をひかないよう、管理委員会が修理費一〇ポンドの支出を承認している記録から推察される。この校長時代の終り頃、生徒数はもう一二〇名（一六八二年）〔注80〕に達している。奨学生四〇名の外は、校長宅に宿泊している者以外は、町の素人下宿にいたと思われるが、校長が監督していたかどうかはわからない。

第七代W・ボルトン（一六八五―九一在職）校長時代の一六八六年、管理委員会は漸く八〇ポンドを投じて校長住宅を用意した。これが校長寮に発展してゆくことになるが、拡張費用は主として校長の手で調達されている。

一七五七年、校長寮に対抗して争った、ホーキン氏寮の記録が出てくるが、この人はハロー校の助教師ではない。

第一二代B・ヒース校長（一七七一―八五在職）の一七七四年、彼は私費千ポンドを投じて増築し、管理委員会は二〇〇ポンドだけ弁償している。その理由は、増築は奨学生のためではなく、もっぱら外来生徒の利益のためだというのである。この校舎は一七七五年の大火で焼失し、管理委員会は今後校舎に火災保険をつけることにした。

一八一八年、校舎再建に一、二〇〇ポンドが支出され、G・パトラー校長（一八〇五―二九在職）は私費五千ポンドを投じ、張出窓のある素晴しい校長寮を建設した。これは一二〇名の寮生を収容できるもので、道路に面する北側に寮生の勉強室があり、寝室は庭園の見える側に造られていた。大きな食堂では下級生がここで食事をとり、集会場は昼食（ディナー）と礼拝室として使用される外は、上級生用にあてられていた。管理委員会はこの棟を「校長寮（スクール・ハウス）」と呼んだ。

ここで漸く校長が、その寮生を監督し、指導する体制が出来上ったといえる。

(1) 校長寮の廃止

一八三六年管理委員会は、校長が校長寮の生徒を特別扱いすることは不当であるとして、寮生をもつことを禁止してしまった。〔注81〕

(2) 校長寮の再建

C・ヴォーンが一八四四年赴任したハロー校では、校長寮は廃止され、焼失し、その後校長私宅が再建されていた。彼は赴任するとすぐ、寮の経営改善の必要と、その模範を示す必要から、校長寮の再開を管理委員会に訴え、その承認を得た後に、校長私宅に接して一棟を増築した。その費用四千ポンドは寄付によったが、そのうち千ポンドはノーザンプトン下院議員ボーモント氏の提供である。彼の子息三人がハロー校で学んでいた。この建物は今「旧棟」と呼ばれるもので、これから生徒達は再び自分達の名前を、寮の壁に書き残すようになった。〔注82〕

(3) その他の寮

寮母寮

R・サムナー校長（一七六〇―七八在職）は学校外における生徒の非行が増しているので、部外者の経営する寮にいる生徒を、校長の監督下におくことを考えた。寮母が経営する「寮母寮（ダームズ・ハウス）」が開かれることとなった。生徒の監督に当る監督生徒数も一七七〇年四名に増員し、翌年は六名とした。最も成功し最後まで残ったのはレース夫人の経営した寮母寮で、これは三五名を収容する二番目に大きな寮で、一八四一年まで存在していた。

それでも寮母の監督下では、青少年の風紀上の問題が絶えないので、校長は次第に寮教師として教頭や助教師を命ずるようになった。助教師を寮教師とし、真剣にその経営に当らせることによって、学校教育の真価が見直されることとなる。優秀な教師を高給で雇うことが出来るようになったからである。（教師の収入の項参照のこと）

寮の性格が一変するのは、一八二〇年代から一八五〇年代のことである。従来は簡易宿泊所の性格以上に出なかった寮が、この時代から学校教育の重要な一環、即教師と生徒、生徒同志の、教育的協同生活の場としての、寮に成長するのである。〔注83〕

次に**ハロー校の寮**を紹介する。

ドルーリー寮　前は修道院であったこの建物は、一八世紀の末寮に転用された。有名な詩人バイロン（一七八八―一八二四）は、この寮の出身者である。

モレトン寮　一八一一年ドルーリー開く、一九一九年管理委員会は七千ポンドで買収した。

グローブ寮　古い教区牧師館であったが、転売された後一八一九年グローブ寮となる。一八八一年最も現代的な個室を寮生に与えるよう改装された。一九〇一年管理委員会は一万四千ポンドで買収している。

パーク寮　一八三一年開設
ウェスト・エーカー寮　一八四七年開設
ブラッドビー寮　一八四九年開設
レンダル寮　一八五四年開設
ノール寮　一八六七年開設
ニューランド寮　一八八九年開設
エルムフィルド寮　一八九三年開設

この外ハロー校独特の小寮が四寮ある。

第一小寮、第二小寮　一八五九年開設
第三小寮　一八六四年開設
第四小寮　一八七〇年開設

小寮建設の目的は次の三つである。

1、虚弱体質の子どもで、大寮の多人数の生活に耐え得ない者
2、学校生活に徐々に馴れさせるよう、特に父母が希望する者
3、大寮に空室ができる迄の待機者のため

一八六一年各寮の寮生は第8表の通り。

入寮は父母の選択

寮生の負担する寮費は、小寮が高い。管理委員会が買収をすすめているのは、入寮者の負担を軽減するための措置である。〔注84〕

3、寮制学校の興隆

イギリスの私立学校は、宗教改革後急速に多数創立〔注85〕され、その後は永い低迷の時代を経て、徐々に発展している。その理由は小修道院、大修道院、カレッジ、礼拝堂等の財産没収解散に伴い、廃校

になってしまった学校が、新たな装いで設立されたためである。

所が一九世紀になると、私立学校の設立が急速にのびている。その中でも、「寮制の学校」の創立が多く、創立の古い有名校と共在しながら、新しい学校教育の受益者層を開拓している。

第6表は一八三〇年以後の年度別、学校規模別一覧表である。現在寮生二〇〇名以上の寮制中等学校は全部で九二校ある。そのうちの四一校（四五％）は、この期間の創立である。公立学校は一八七〇年以後設立されている。

4、教師　校長と聖職位

アーノルド校長時代のラグビー校（一八三〇年代）では、古典担当教師（数学を兼任している）は校長以下一〇名、そのうち聖職位をもつ教師は九名であった。〔注86〕アーノルドは一八三一年ラグビー校礼拝堂付牧師職が空席となった時、自らその職を引受け、報酬五〇ポンドは礼拝堂修理費として寄付した。〔注87〕

ハロー校では一八六〇年代、教師数二二名（古典教師校長共一六名、数学教師四名、現代外国語二名）である。このうち聖職位をもつ教師は校長を含め一一名であった。〔注88〕

その後、教師の中に占める聖職位保持者の比率は下っている。それは教育課程が多岐にわたり複雑化してくる為で当然なことである。それにも拘らず、T・W・バンフォードの調査によれば、一八九三年代表的な二二校の寮制通学制別、校長助教師中の聖職位保持者数は、第7表の通りである。

5、聖職位をもつ寮教師　校長の任務

教区を担当する牧師は、教区内に住む青少年の宗教教育に責任がある。堅信礼を受ける前の子どもたちの友人として、精神的指導者として、年間八回或はもっと度々面接の上、彼等がもつ心の悩み、告白を聞いてやらねばならぬ。一五、六才の子どもが素直に悩みを訴え告白するかどうか、この関係をつくり上げることも困難な仕事である。また告白されたことに率直に適当な指導と助言ができるかどうか、これも大変な修業がいると思われる。告白は強制されないにしても、両親の許可のもとに行われる。こうして堅信礼までに、イギリス国教会派の一信者としての心の準備が、教区牧師を通じて行われている。〔注89〕

ハロー校の週行事、年間行事を見ると、この教区牧師の仕事にかわる行事が多い。日曜日午前の礼拝堂行事では、聖職位をもつ助教師が説教し、夕の行事では必ず校長が説教する。聖書の講義は、日曜日午後三時から一時間、月曜日午前七時半から九時までの二回。堅信礼は二年に一回、僧正を招いて正式に開催されているが、その準備は校長はじめ寮教師の仕事である。個人指導教師は候補者に毎週試験を課し、校長は毎週個人別に面接して事前教育を実施している。ハロー校では候補者の最低年令を一六才としている。この年を彼等は子どもが大人となるための、身体的にも精神的にも成人式と考え、国家社会の後継者づくりに最大の努力を傾けている。

父母はその子が立派な信者に育つよう、この目的のためのみにこの学校を信頼して入学させ、校長と寮教師にそれを期待している。校長と寮教師はその期待に応えるよう、知恵を絞り、努力している。このように、イギリス社会の紐帯となるべき宗教教育が行われているが、その中心となっている人物は、聖職位をもつ校長と寮教師たちである。

6、校長の宗教的立場

オックスフォード運動

ヴォーン校長はよくウィンチェスター校のG・モーバリー（一八〇三―一八八五）教頭と比較される。モーバリーは一八三五年から凡そ三〇年間教頭をつとめ、その後サリスベリー僧正となっているが、オックスフォード運動の熱心な支持者であった。一九世紀の中頃（一八三三―四一）、イギリス国教会の中にカトリック復帰的な傾向が現われ、指導者はオックスフォード大学の神学者キーブル（一七九二―一八六六）、ニューマン（一八〇一―九〇）などであった。彼等は初代教会の生活と教えに復帰して教会の革新をねらい、僧正の権威、伝統、歴史的努力としての教皇に対する尊敬などを強調し、ミサ聖祭、告白の秘密、独身、断食などを強調し、国家の監督からの解放を要求した。〔注90〕このような考え方をもつ者を別名「高教会派（ハイ・チャーチ）」とも呼んでいる。モーバリーはこの運動の支持者であった。そのためか生徒たちはウィンチェスターを素通りして、ラグビーやハローに集ってきた。（ウィンチェスターは彼の在職中の最後の頃漸く二〇〇名をこえ、一八六一年二〇一名、一八六二年二一六名であった。）〔注91〕

「広教会（ブロード・チャーチ）」運動

オックスフォード運動に真正面から反対したのは、ラグビー校のトーマス・アーノルド（一八二八―四二在職）である。彼は一八三五年一一月、親友コレリッジ判事への手紙の一節に、「私の生涯の理想は、エドワード六世時代の宗教改革者の理想を完成させることである。即、真の国民的なキリスト教会を築き上げること、真の国民的なキリスト教徒の学校制度を築き上げることである。」〔注92〕と述べている。イギリスの宗教改革が、教会の信仰上の革新に発展してゆくのは、エドワード六世（一五四七―五三在位）時代である。王は幼少であったため、福音運動に理解のある摂政ソマセット公と、ルター的な福音信仰をもつ大僧正クランマーの協力を得て、改革事業がすすめられた。一五四九年聖職者の結婚が認められ、その翌年までに教会内の聖画像が取り除かれ、さらに断食、秘密ざんげ等が廃止され、礼拝形式をきめた「礼拝統一令」（一五四九年）では、ラテン語をやめて英語を使用することをきめた。「一般祈とう書」（一五五二年発行）はカルヴァンの立場に接近したものだといわれている。エドワード六世の急死によって、福音の王国建設事業も中断されてしまった。〔注93〕

次のメアリー女王（一五五三―八）時代、カトリック教会復帰政策がとられ、エリザベス女王（一五五八―一六〇三在位）時代、イギリス国教会制度が確立された。ピューリタン革命（一六四二―六〇）、名与革命（一六八八―九）、イングランドとスコットランドの大合同（一七〇七）等、宗教上、政治上の大変動を経ながら、産業革命の時代に入ると同時に、宗教論争も多岐にわたってきた。

アーノルドは、国家と教会の最終目的は同じく国民の最高の幸福を実現するにあると考え、教会の礼式、儀式、それに対する意見はいろいろあるにしても、キリスト教徒の強固な大同団結によってのみ、この地上に神の国を実現することができるのだと、或は説教により、或は論文によって人々に訴え続けた。彼の考え方は、各種各様の考え方をもつ人々を、一人でも多く、広く吸収したいとする広教会派の考え方である。このアーノルドの宗教的態度を支持する多数の人々は、その子ども達を続々ラグビー校に送ってきた。一八三〇年代から四〇年

代にかけて、ラグビー校の生徒のうち、牧師の子どもの占める比率は一五%から二二%に上昇し〔注94〕、ラグビー校の月謝無料の恩恵を受ける目的で移動してきた者は、一八四四年から二〇年間に一三〇家族に達している。〔注95〕

アーノルドの志をついだ者は多いが、ウェストミンスター本寺長A・P・スタンレー（アーノルド伝の編著者）と、ハロー校のC・ヴォーンは高弟中の双璧である。

7、校長及び助教師の報酬

教師の報酬は、学校がもつ学校財産収入や、過去の条件によって異なり、また寮をもつ学校の寮教師の収入は一般に高額となっている。ハロー校の場合、財産収入が少い上に道路修理費に多額を支出しているので、教師の報酬は殆んど父母負担となっている。（前号にイギリスの教育(6)に引用、一八六〇年年間総収入五、一三九ポンド、道路修理費三、四〇〇ポンド余支出、学校へは一、七〇〇ポンド支出）。

(1) 校長の報酬

(A) 収入

管理委員会から報酬と石炭料		五〇ポンド
自費生月謝一五ポンドの五分の四	四五〇人分	七、六五〇
校費五ポンド		
入学料五ポンド一四〇人分		七〇〇
寮生からの収入二〇ポンド六三人分		一、二六〇
新入生入寮費六ポンド二五人分		一五〇
奨学生三六人分の校費		九〇
商業学校月謝五ポンド二〇人分		一〇〇
合計		一〇、〇〇〇

(B) 支出

助教師報酬一二人分（一人一五〇ポンド）	一、八〇〇ポンド
同 五人分	八一〇
商業学校の教師へ	一五〇
同 フランス語教師へ	六〇
同 教室の使用料	二〇
礼拝堂オルガン奏者へ	六〇
同 音楽教師へ	五〇
学校監視人報酬	二五
一教室の使用料	一二
礼拝堂と学校のガス代	八〇
校舎修理清掃と石炭代	一四〇
賞品としての書籍代	二二五
試験用紙印刷代	二〇〇
試験官謝礼（二名分）	四〇
礼拝堂校舎火災保険料	四〇
合計	三、七一二
差引残高（校長の収入概算）	六、二八八

〔注96〕

(2) 助教師ブラッドビーの報酬

校長から支給される金額	一五〇ポンド
個人指導生徒四〇人分	六〇〇
寮費（九〇ポンド）のうち全消費を支払った残額一人	
二九ポンドの一六人分	四六四
収入合計	一、二一四〔注97〕

（参考一八六〇年代表的な校長の収入は、イートン校教頭四、五七二

ポンド、〔注98〕ラグビー校長二、九五七ポンド、〔注99〕セント・ポールズ校長（全員通学制）九〇〇ポンド〔注100〕

8、校長引退後の地位

大きな学校の校長には、校長引退後のことについては全然心配はなかった。校長職はいわば一つの踏台で、校長を成功裡に勤め得た後には、必ず相当の地位が待ちうけていた。教会関係でいえば、本寺長とか僧正の地位である。その中でも最高のカンタベリー大僧正の地位についた人には、次の人達がいる。C・T・ロングレー（一七九四―一八六八）〔注101〕はハロー校長（一八二九―三六在職）からリポン僧正を約二〇年、その後ダラム僧正、ヨーク大僧正となり、一八六二年カンタベリー大僧正となり、現職のまゝ没している。A・C・テート（一八一一―八二）〔注102〕は広教会派に属し、ラグビー校長（一八四二―八在職）をへて一八六八年（ロングレーの没年）大僧正となっている。E・W・ベンソン（一八二九―九六）〔注103〕はラグビー校助教師から、新設のウェリントン・カレッジ校長（一八五九―六八在職）に転じ、テート没後の一八八三年大僧正となっている。

教会以外としては、オックスフォード又はケンブリッジの教授となった者、或は新設の大学に転じた者もいた。その中の一人A・M・バトラー（一八三三―一九一八）〔注104〕は、ヴォーンの後のハロー校長（一八五九―八五在職）をつとめ、その後母校トリニティ・カソッジ学寮長を没年まで勤め、その間一八八九―九〇年にはケンブリッジ大学総長（バイス・チャンセラー）もつとめている。

一一、道徳・宗教教育

1、宗教的人間の形成

われらはさきに教師の資格・任務について述べてきた。これは彼等が望む理想の人間養成のための前提となるものである。では理想の人間像を形成する紳士道の実践と、イギリス国教会派の信者養成は、如何にすゝめられているか。

彼等はこれを別々のものとは考えず、学校礼拝堂における宗教行事、教室における聖書講義、古代史の訳読、寮における生活、これらが渾然一体となって養成さるべきものと考えている。その概要は凡そ次のように述べることが出来よう。

(1) 宗教教育のための特設時間

（i）礼拝堂行事

A、日曜日三回八・三〇―一一時一七時午前中の説教は聖職位をもつ助教師が輪番に行う。夕の礼拝の説教は校長が受持つ。日曜日生徒たちに禁止されることは、街頭に群をなしてたたずみ、寮外をうろつくことである。

B、月曜から土曜まで朝食後礼拝堂行事

C、以上の外の礼拝堂行事

学期最初の第一日、各聖人の日、キリスト昇天祭日、創立者記念日、四旬節期間（復活祭までの四〇日間）は水曜日と金曜日の朝

（ii）聖書講義

日曜日（午後三・一五―四・一五）、月曜日（七・三〇―九・〇〇）、全学級宗教の時間

(2) 堅信礼のための準備教育

堅信礼又は信徒按手式とは、新教では通例幼児洗礼を受けた者が、

成人としてその信仰を告白して教会員となる儀式のことをいう。イギリス国教会では、子どもたちは信仰箇条の研究を深めた後に、会衆の面前で信仰告白をして教会の正会員となる儀式で、僧正の手で行われる。

ハロー校では校長が僧正の同意を得た上学校礼拝堂で隔年毎に実施している。堅信礼を受ける最低年令は一六才である。学校は堅信礼実施の注意を掲示し、受信候補者の氏名が校長宛に通知される。個人指導教師はこの候補者に毎週試問する。校長は毎週礼拝堂に候補者全員を集めて説教を繰返し、校長寮その他の寮の候補者個人にも面接する。堅信礼の直前に名簿は厳重に再点検される。堅信礼は学校が始まって少くとも六週間経過しなければ行われない。〔注105〕

(3) 宗教教育の賞と罰

A、賞　ボーモント氏賞（書籍一〇ポンドと五ポンドのもの二計三冊

聖書試験優秀生徒へ〔注106〕

B、罰　礼拝堂への遅刻者、欠席者は必ず校長のもとに出頭し、それぞれラテン語書取三百行、五百行の罰を受ける。〔注107〕

2、監督生徒

宗教教育は学校教育の中心課額で、校長はじめ全職員は最大の努力を払っている。紳士として、キリスト教徒として、如何に考え行動したらよいか、その実践の場が学校と寮である。「少年を支配する唯一の真の方法は、彼等が彼等自らを支配するよう訓練することである」〔注108〕と信じ、その具体的な実践案が、監督生徒制度と当番下級生制度である。著者は最初、最上級生を学校の秩序維持責任者とするために、ヴォーンは先づ前任校長が残した監督生徒達を、校長の食卓に招いたことを述べた。

この件についてP・M・ソーントンは彼の文章の中で、ヴォーンは強い決心のもとに、最も信頼出来る少年たちに、もし校内に不法が行われた場合、相手を徹底的にこらしめるだけの権威を与えた、これが監督生徒制度であると述べている。彼は続けて、「教師は広く道義に責任があり、監督生徒は風紀取締り上の責任があると考える。しかしこのような考えをハローに持ちこんで実施することなど容易ではない。ソーントンは、ハロー校歴代の校長はヴォーンと同等の学問をした上、同じく学者でもあった。しかし、ヴォーン校長ほど、人間を取扱う臨機応変の才能と、直観的知識の持主はいなかった」〔注109〕と。

監督生徒の任務

ヴォーン時代六年生は上級下級に六〇名いた。この六年生全員には最上級生としての責任が与えてあるが、特にこの中で、知力体力すぐれ、人格の面からも全教師全生徒の信頼あつい一五名を、監督生徒に任命していた。監督生徒には校長から特別の権威と責任が与えられ、その懲戒権は全生徒に及ぶ（すぐ下の五年一級と五年二級を除く）。（彼等の任務は寮教師を助け校内と寮内の秩序が維持されるよう、特に夜間の規則違反が出ないよう努力することである。彼等が取締る道徳的違反行為とは、弱い者いじめ、飲酒、粗野な言語と行動である。校則違反行為とは喫煙、飲食店への出入、町での投石等である。

監督生徒の平常の任務は、常に紳士的態度で学習に精励すること、スポーツ面では常にリーダーとなり先頭を進むこと、常に下級生の友人・保護者となること、校規校則が正確に守られるよう、校内、寮内の秩序の維持につとめることである。

監督生徒が大きな違反事件を発見したら、早速校長に報告せねばな

らぬが、報告する前に監督生徒の手で処理することが、最も望ましい。教師が与える罰よりも、監督生徒が与える罰が価値が大きい。この価値を重視しているバトラー校長の指導は、凡そ次のようである。

「第一段として、監督生徒が校長のもとに報告に来たら、先づ当事者の名前は伏せておいて概要を報告させ、然る後に監督生徒が処理したがよいか、又は校長が処理したがよいか、詳細に検討した上、監督生徒が処理出来る方法を講じ、持帰らせる。

第二段として、この件について再度報告に来たならば校長自身で処理する（罰則は別項）。その後校長はこの監督生徒と個人的に、彼が見落している点についてあらゆる角度から検討し、意見の交換をしながら、対人関係は如何にあるべきか、如何に処理すべきかについて話し合うことにしている。

年長の生徒が、年少の生徒の上に権威をもって臨むということが望ましいかどうか、私の信念をいえば、大きな学校でこの制度がなかったら、健全な運営は出来ないと考えている。監督生徒の権威の限度、権威維持の方法は、学校の伝統と共に変ることであろうが、少年を支配する唯一の真の方法は、彼等が彼等自身を支配するよう訓練することだという考え方に、私は満足している。

少年たちは学校内に大小数千の非行があることを知っている。教師がそれを知ろうとすれば沢山の監視人をおかねばならないし、監視人をおくことは訓練方法としては致命的な悪結果をもたらすこととなる。それとは別に、少年たちもやがては成長して監督生徒の一員となり、善を維持し悪を退ける立場の学校側に立つのであるが、その学校側には（数千の非行が）つかまらないということは、少年の人格形成上大きな道徳的影響を与えると思われる。

少年たちはあの同情深い監督生徒の手で、正義が実行され邪悪は反対され或は罰されているのを見ている。その監督生徒のもつ善悪の標準は、少年たちのそれと段遠いのものではなく、その知力・体力もこの学校の普通の代表者なのである。信頼されて権威を与えられた監督生徒にとって、この権威を忠実に実施することは、教育の方法としても大変価値が高い。

責任をもっということは、思想を高めることゝ同様大事だと考える年令に達した監督生徒は、他人の立場を考えるようになる、正しいことをしようと求める、大胆な手本が他人の心を清める効果をあげようとする、人を裁くのに慎重に善悪を弁別しようとする、決断することの価値を学ぶ、そして、道理にかなった権威に敬意を払うよう、習慣づけられる。」〔注二〇〕

監督生徒制度について以上のように報告しているバトラー博士は最後に、パブリック・スクールで最上級生に校長公認の権威と責任を持たせているのは、年少の下級生を他の暴力から保護するためだと述べ、今やハロー校には六年生の暴力行為も、厳格すぎる行為もない、私は前にはこのハロー校で学んだ少年として、現在は校長として、この監督生徒制度が成功していることに満足している、と結んでいる。

3 体罰事件

監督生徒制度はバトラー校長時代、以上の如く順調にすゝんでいるが、ヴォーン校長時代の一八五三年、次のような体罰事件が報告されている。

監督生徒プラッツとステュワート少年がフットボール競技場で口論をはじめ、プラッツは罰として笞（むち）を与えると宣言した。ステュワートは監督生徒の不法をなじり、直接校長に訴えでた。校長は理由の如何を問わず監督生徒の命に服することが当然だとして、受付けなかっ

た。その結果ブラッツは許されるうちでは最も重い笞で、三一打を与えた。打たれた少年は医師にかゝり、重傷と報告された。ヴォーンはステュワートの父へ「ご子息の行動は実に立派でした」と手紙を書き、ブラッツには退学を命じたのである。

以上が概要だが、この事件は世論を刺戟し、監督生徒制度そのものの在り方まで批判を受けた。パルマーストン卿（ハロー校卒業生、政治家、ハロー随一の実力者）はヴォーン校長に質問状を発し、ハロー校で監督生徒の権威を強化する現在の方法に疑問があると、釈明を求めてきた。これに対するヴォーンの手紙が残っている。

この手紙で彼は、「A・P・スタンレーの『アーノルド博士の生涯』を読まれた方々は――この本は多くの方々からこの問題（監督生徒制度）の権威書として認められている――六年級の生徒が笞を使用する権利は、ラグビー校教育成功の最大理由となり、監督生徒制度及びその効果を発揮する上で欠ぐことの出来ないものとして、アーノルドが最も熱心に主張したものの一つであることに気づかれたと思います。自分の地位の安泰と名声のみを案ずる教師であったら、直ちに論争する力も消え去ることでありましょう。……体罰はどんな形でも、又誰が加えたとしても、現在の人権尊重の考え方、或はませた男らしさを求める風潮とは、一致するものではありません。現在どのパブリック・スクールを見ても、ある種の小反抗事件が起っています。それは道徳そのものに対してよりは、身だしなみに属するものであります。例えば大あばれ、粗野、反抗的言辞、他人に迷惑をかけるささいな虐待、暴虐その他の事であります。

現在では教師がその実情をつかむことは出来ないし、それ故これらの身だしなみに反する行動をとっても、罰されることはありません。……そこで人は教師の手足となる一階級下の教師助手を創造し、少年達のレクレーションや休息時間について廻り、公然のスパイとして少年達の言動を抑え、見たり聞いたりしたことを監督者に報告させるかも知れない。これこそイギリスのパブリック・スクールの偉大な栄光とみなされている、即人格の自由な発展と社会的拡大、簡単にいえば自由、この堅実な知的な自由にとって、破滅的なことである。……そこで年長で能力すぐれ、勤勉な一〇名、二〇名の監督生徒が、公認された権威をもって、下級生の上に注意深く振舞うよう、その能力を与えているのである。」〔注二二〕

外面からの取締りだけで、学校内の非行がなくなる筈はない。それでも尚監督生徒をおき、非行を生徒たちの内部から絶対しようとして、宗教教育と生活訓練を平行して実施している。イギリスの教師たちの努力は遠大である、そして成功している。彼等の実践を別の言葉に整理して表現すると、

「君の意志の格率が、常に同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」〔112〕となると思われる。

4 当番下級生

六年級の六〇名は当番下級生をもつ権利がある。当番下級生となる者は、五年級以下の全員で、最年少の三年級生と既に三年間当番勤務を終った者を除く。当番下級生の任務は、六年級生のため使い走り役をつとめることである。朝食やお茶の用意をしたり、又その後片づけをする。洗濯や掃除は召使いがする（寮によっては全部召使いがする場合もある。

体育の際の雑務としては、夏の学期中、六年級生がクリケットをやっている時は、一定数の当番が順に球拾いをする。これは午後六時半から八時までである。フットボールの時期には当番はおかない。五年以下全員強制的に参加させ、週三回、午後一時半実施する。但し病人

は除く。当番下級生として当番をやらせ、強制的にゲームに参加させることに疑問があるかも知れないが、これは学校教育に活を入れるものだと信じている。生徒の中には入学直後、遠慮からか、優柔不断からか、団体競技に参加するのを恥かしがる者が多い。〔注113〕

5 違反者への罰則

(1) ラテン語の書取り

普通の罰は五〇行から五〇〇行の書取り

(2) 特別教室おくり

この罰は週三回の半休日の午後、特別教室で助教師監督のもとに一時間書取りをし、その氏名は台帳に記録される。

(3) 校長罰

校長のもとにおくられる違反者は次の通り。

(A) 礼拝堂行事の遅刻者　罰三〇〇行

仝　　欠席者　罰五〇〇行

(B) 他の助教師からおくられる違反者

校長に発見された違反者

（違反とは嘘言、野卑な言葉、神を汚す言葉、礼拝堂内の不品行、飲酒、飲食店出入り、町のならず者との交際、かけ事、喫煙、ひどい弱い者いじめ、試験の不正等）。

初犯者には彼の違反事項を記録し、三〇行から五〇行の軽い罰を与え、休日の一定時間に持って来させ、これを二、三回続けて注意する。このやり方は遅刻者、欠席者にききめがある。

(4) 体罰

体罰は校長のみが行うものとする。体罰を加えるかどうかは、生徒の年令、校内における地位で考える。五年生には加えない。体罰を与えるのは、下学年学校の生徒に限っている。〔注114〕

6 宗教観　個人の永生　社会結合の紐帯

ヴォーン校長時代ハロー校助教師となり、さきに校長付助教師として紹介したウエストコットは、ヴォーンの宗教教育について次のように述べている。「ヴォーン博士の説教の力は、その文体や表現の完全さ、見解の幅とか判断の健全さにあるのではなく、もっともっと外のものにある。博士は彼が話しかける人には誰にでも、彼の真の共感に気づかせることが出来た。表現には色々の方法があるとしても、主導的思想は、人は神に向うようつくられ、神なくしては心の平安を得られないという、神との個人的交友関係にあるという、考え方である。〔注119〕（傍点は著者）

ヴォーンの宗教観が広教会派に属していたことは先に述べた通りである。この広教会派の信念を最も強くもち、機会ある毎に説教や論文形式で強力に発表し続けてきた一人が、彼の恩師ラグビー校長トーマス・アーノルドである。彼が宗教教育について述べた説教の中で、「宗教教育という言葉の真の意味を考えてみるに、それはわれらの子どもも達に永遠の生活に入るための訓練をすることであり、神についてよく知り神を愛するよう仕向けることであり、われらがもって生れた本性を、神がそれらに与えられた目的に沿うよう適合させることであり、最高の真理を知るための理解力を与えることであり、最高善を求めようとする愛情を育ててやることであって、これ以外に宗教教育はない。

さて、われらの学校や教師たちはその子どもに、文字の読み書きを

正確に教えていると同じように、宗教教育を実施しているであろうか？教師たちは確かに教授しているように、教育することができるであろうか？もし出来るとしたら、彼らのはたらきは真に偉大な恵みであるといわねばならぬ。彼等の価値は如何に評価しても、評価しきれないほど高いものでなくてならぬ。これらの教師たちをわれらの教会員から引き離すことは、教会員が永遠の生活に入ることから引離すことになる。反対に教師たちを教会員に与えることは、天国への門を開くだけでなく、現実に天国に導くこととなる。

しかし、神の言葉そのものをもってしても出来なかったことを、教会につかえる人々の手で易々と出来る筈がない。キリストが教会に与えた使命は、キリストの精神の成長をはかり、その結果人々が堅く結び合うよう、教化することにある。教会はそのはじめから現在まで、この輝かしい使命をその全会員に果したであろうか、このことをわれらはよくも知らずに過してきた。学校の教師たちは子どもたちに、読み書きを確実に教えるようには、宗教教育はやって来なかったのである。

それ故、学校を創立することは、教育を提供することだと考えた人、或は聖書と教義問答を教える学校をつくりさえすれば、そこで宗教教育が行われているのだと考えた人は、彼が創立した学校の業績を見て、失望したにちがいない。たしかに人間の魂を救済するということは、生易しいことではない。われらの大敵は易々と消え去るものではない。すべての子どもの魂から、死の恐怖を取り除き、子ども達の本性に巣くうすべての煩悩を克服し、子ども達の心の中に神の精霊のお仕事を育て完成するのに、数万金を寄付して立派な校舎を建て、校長や教師を任命したり、学校を教区内の子どもで一杯にする等のことで、出来るのではない。では学校では何が出来るのか。学校は初歩の宗教教授は行うことができる。子どもに読み書きを教え得ると同様に、どの子どもにも教義問答を唱えることを教え、讃美歌を教えることは出来る。学校はたしかにこの程度はやれる。これは決して軽視してはならない。われらは学校がこれ位は、或はもっとやれることはよく知っている。しかし、確実に魂を救済するということからはほど遠い。かといって、これさえもしなかったらもっと悪くなるし、これだけでもあった方が、どれだけ良いかわからない。……

人々にキリスト教徒としての教育を施すということは、彼が神をよく知り愛するようにすること、キリストの信仰を持つようにすること、キリストが人間の罪をあがなう為に犠牲となって死に、さらに復活するという事実を教えること、人間の心情を聖霊のいかなる刺戟にも熱心に開くようにすると共に、キリストが精神生活の主であり、授与者であるという、二ケア信条〔注16〕に述べてあるような事実を教えること、これが宗教教育である。

さて、このような宗教教育を教室の課業だけでやりきることが出来ようか。キリスト教徒の教育という一大事業は、単に学校の校舎があって教師がいるということで、直ちに確実にその効果が現れるというものではない。全教会と全国民の協同の努力によってのみ、さらに詳しくいえば、教師と父母の力、学校の友人の力、家庭の兄弟姉妹の力、使命を自覚した牧師の力、地主、農夫と商人、労働者と職人、女王とその大臣の力、議会における国民の合意の力等、以上述べた一つ一つ又は全てが、悪への誘惑を取除き、より容易に善をなし、より名誉を与えられ、それらの模範によって他人への信頼と、霊的な清らか

さの存在することを確信させることによって、人をしてこの地上に神の王国の恵み深い成果を見、彼等の神と救世主を熱愛し、その栄光をたたえることが出来るのである。このような結果を見てはじめて、宗教教育という一大事業が行われたといえるのである。……

子どもの教育は、学校内と同様学校外でも事実行われている。この校外の影響は最も強力なものである。……われらの周囲の人々や環境がわれらに常に影響を与えている。彼等は常に善の意識を強めているか、又弱めているかしている。……親が貪欲・享楽・短気とかその他の悪い手本を示せば、これは教師の教授よりも一層強力な影響力がある。この両親は教師が教育する以上の悪い影響を及ぼしている。……

再度考えてみよう。学校は立派なキリスト教徒の教授を与えてくれるであろう。さらに学校は多くの者に、キリスト教徒教育のより高い恵みを与えてくれるであろうと期待している。学校は多数の者にキリスト教教育を与え、学校がよくなるに縦って、真のキリスト教徒の数は多くなるであろう。学校では、教師の示す模範が彼の教授に一致して良くなり、生徒（監督生徒）が彼等自身で模範を示し影響を与えるよう、教師が仕向け努力することが（これは教師自身の模範より、もっと大事なことである）、その通り実現するとき、教授することと同様、教育することも最大の効果を挙げることになる。

もし教師がこのことに成功すれば、彼の学校は生徒にとって真のキリスト教徒教育の場所となり、学校はキリストを教え、神を愛し神に随従することを教えたことになるであろう。……真にキリスト教徒教育を受けた少数の者を社会におくり出す学校が増すならば、その数は少数であっても、絶対数は多くなる。これら少数の者がパン種となって大量の粉の中にまじって、遂にすべてといえないにしても、大部分のものが感化されることになるのだ。」（説教集、第五巻、一八四二年発行から引用）〔註117〕

一二、施設の改善充実

施設の教育的意義はいうまでもなく、教育内容を適確に伝達するための手段としてである。ヴォーンは着任と同時に校長寮を復活し、大小寮の新増設、水泳場、書店の新築等に努力した。次に礼拝堂の増設、商業学校の設立について述べる。

礼拝堂の拡張工事

ハロー校はもともと教会付属の学校として発達し、教会とは密接な関係にあった。説教する牧師へ年三〇回分の謝礼一〇ポンド（イギリスの教育(6)三四頁）がきめられ、これは一六七二年一五ポンド、一七六三年二五ポンドに増額され、学校の生徒の宗教教育を目的に副牧師が増員されている。

ハロー校の礼拝堂が建設されたのは、一八三九年のことで、建設費三、八四七ポンドは寄付金によった。ヴォーン時代生徒四百名となって増築計画がすすめられた。一八五四年礼拝堂の内陣（通例東側の端にあり唱歌隊と牧師の席となる）の拡張工事（費用二、五〇〇ポンドはヴォーンの私費）がはじまり、内陣の地下室は納骨堂となった（学校内に死者があればここに葬むる意）。一八五五年北側の回廊（本堂に平行する側面の通廊）工事は助教師・父母の寄付で着工された。翌年は南側回廊工事、これはクリミア戦争（一八五三―六）で戦没した卒業生二二名を記念する事業である。礎石定置式で校長は戦死者の氏名を読み上げ、「彼等の身体ははるか遠い彼の地に葬られた。しかし彼等の名はわれらの胸に永遠に生きている。」工事は翌年終った。

内陣の窓のスティンド・グラスは完成までに四年かかった。旧約、新約聖書の代表的場面が描かれている。記念回廊上の五枚のうち四枚は、ハローの商人・農民たちがヴォーンへの感謝をこめて贈ったものである（彼は奨学生を増員し商業学校を創立した）。礼拝堂は彼の後にも、尖塔の増築（一八六五年）、パイプオルガン寄贈（一八八五年）、南ア戦争記念碑（一八九九―一九〇二）、ドイツ戦争記念碑（一九一四―八）が増築されている。〔注119〕

商業学校の創立

ハローの住民がハロー校に求めるものは次第に変ってきた。高尚な古典教育よりも、すぐに役立つ商業教育こそ望ましいと、その創立をハロー校管理委員会に申し出たのは一八四九年のことであった。委員会は拒否した。その理由は、勅許状にあるグラマー・スクールとは、ラテン語、ギリシア語の古典を教える学校の意味である。それ以外の目的のものには支出し兼ねるという。ヴォーンはこの問題を重視し、漸く一八五三年次のような妥協案で管理委員会の承認をとりつけた。全生徒ともラテン語を学習する。ラテン語以外の英語文法、作文、歴史、地理、フランス語、音楽等の月謝年五ポンド支払う、というのである。学校は以前臨時の教会に使用していた古い建物を使用して開校された。〔注120〕

この学校にどれ位の犠牲を払ったか、校長の報酬の項で述べた通りである。収入二〇名の生徒から一〇〇ポンドに対し、支出は商業学校教師へ一五〇ポンド、フランス語教師へ六〇ポンド、教室使用料二〇ポンド、合計二三〇ポンドである〔注121〕ハローの住民の感謝は大変なものであった。

奨学生の増員

創立当時無料の奨学生四〇名〔注122〕は、一七三九年一四名〔注123〕に減員された。その後一八一六年三名、一八二五年一七名、〔注124〕一八四五年一六名、一八六一年三三名、〔注125〕一八六二年三六名〔注126〕にまで復活している。特別奨学生ジョン・ライアンの特別奨学生八名年三〇ポンド、四年支給はじめ、セーヤー氏奨学生二名、ニールド氏奨学生二名、グレゴリー氏奨学生一名、スペンサー氏奨学生一名、合計一四名。奨学金総額は五三五ポンドに達している。〔注127〕

一三、辞任　聖職者養成事業に入る

ヴォーンは口癖のように、一人の校長が一校に勤める年数は一五年だ。それ以上になれば学校は不幸となるといっていた。彼は生徒数を七倍にし、寮も大小寮一〇寮という、イギリス第一流の学校に育て上げた。一五年は夢のように去った。彼は四三才の若さでハローを去った。彼の後任はH・M・バトラー博士（彼はG・バトラー（一八〇五―二八ハロー校長）の第二子でハローに二六年勤め後トリニティ・学寮長となる）であった。

ヴォーンはその後ドンカスター教会牧師、法学院教授、後にランダフ本寺長に任命されているが、三〇数年間一貫して聖職位授与の仕事（神学研究・説教の方法・貧乏人病人の側での過し方等を教える）に関係し、彼のもとから育った聖職者は、カンタベリー九六代大僧正テンプンはじめ四五〇名と記録されている。彼は一八九七年八一才で没し、ランダフ教会に葬られた。〔注128〕

第1表

日英学校一覧				
	学校	学校数	1校当生徒数	教員1人当生徒数
日本	小学校	22,444	423	25.8
	中学校	10,717	440	21.0
	高等学校	4,233	999	20.8
	大学 (国立)	75	4,127	8.4
	〃 (私立)	274	3,820	30.7
英国	公立			
	初等学校	23,054	207	29.6
	中等学校	5,454	542	19.5
	私立			
	直接補助学校	315	407	16.5
	独立学校	2,924	143	14.9
	初等学校	1,709	95	15.7
	中等学校	417	206	12.1
	初・中併設	680	244	16.0
	その他	—	—	—
	大学			
	大学	44	4,806	8.1
	教育カレッジ	163	651	10.0
	オックスフォード (カレッジ数)	31	283	8.7

注，　日本教育年鑑1972年版による。英国の大学数でオックスフォードを一大学とするは不合理である。学生8,773名，カレッジ31で算出した。
日本の大学は短大を除き，国立と私立のみを挙げた。

第2表

学級編成表 (1861年12月)					
学年級名	生徒数	内奨学生数	学年級名	生徒数	内奨学生数
監督生徒			シェル1級	36	3
6年上級	31名	3名	〃 2級	37	4
〃 下級	31	1	〃 3級	34	2
5年1級	34	2	〃 4級	36	6
〃 2級	34	2	4年1級	36	4
〃 3級	32	1	〃 2級	32	
〃 4級	34	3	〃 3級	17	
レムーブ級	36	2	3年級	4	
			合計	464	33

第3表

6年上級（校長学級）生徒の実態 (1861年12月現在)					入学後の欠席状況
生徒番号	年　令	6年級入級年月	ハロー校入学年月	入学時の所属学級	
1	18.3	1859.9	1857.4	シェル　1	
2	18.6	60.1	56.1	〃　3	
3	17.10	60.3	58.3	〃　2	
4	18.1	60.9	56.1	〃　3	
5	18.9	〃	57.9	〃　1	
6	18.6	〃	57.3	〃　2	
7	18.1	〃	57.9	〃　1	∘1858年10週
8	18.0	〃	〃	〃　2	60年4週，61年3週
9	19.3	〃	56.9	〃　4	∘1860年6週
10	17.2	60.10	58.3	〃　2	
11	18.2	61.1	58.9	〃　2	
12	16.10	〃	59.5	〃　1	
13	18.1	〃	58.9	〃　1	
14	16.10	61.3	59.3	〃　4	
15	19.3	〃	56.9	4　年　2	
16	18.0	〃	57.3	シェル　3	
17	18.3	61.9	57.1	〃　3	∘1861年6週
18	18.9	〃	55.9	〃　4	
19	18.5	〃	56.9	〃　3	
20	17.2	〃	57.9	4　年　1	
21	18.0	〃	58.3	シェル　4	
22	17.8	〃	58.1	〃　1	∘1861年10週
23	17.2	〃	58.3	〃　3	
24	17.4	〃	58.1	〃　3	
25	17.1	〃	57.9	4　年　1	
26	16.9	〃	58.1	〃　1	∘1860年3週
27	17.7	〃	57.3	〃　2	∘1861年10月中
28	18.4	〃	〃	シェル　2	
29	16.8	〃	57.9	〃　3	∘1859年6週，60年3週 61年4週
30	18.4	〃	〃	〃　3	
31	17.8	〃	57.3	〃　4	

Report, vol, Ⅱ, P. 359

第4表

校長の週授業計画表 6年上級　30名　担当，校長と校長付助教師　1861年7月現在				
		教科指導	校長の作文個人指導	助教師の作文個人指導
日	8.30—	礼拝堂		
	11.00—	礼拝堂		
	15.15—16.15	新約聖書使徒書簡		
	17.30—	礼拝堂		
月	7.30—9.00	使徒書簡		
	11.00—12.00	ギリシア語訳読	10.00—11.00（1名）	10.00—11.00（2名）
	15.00—17.00	数学（2学級にわける）		15.00—16.30（3名）
	17.00—18.00	訳読		
火	8.15—9.00	アリストファネス		
	半休日		10.00—13.00（5名）	
水	7.30—9.00	訳読（ソフォクレス）		
	11.00—13.00	現代外国語（2学級にわける）	10.00—13.00（4名）	11.00—13.00（4名）
	15.00—17.00	数学（2学級にわける）		15.00—16.00（3名）
	17.00—18.00	訳読		
木	7.30—9.00	興読（ヴァジル）		
	11.00—12.00	歴史（ギゾー）		10.00—11.00（2名）
	半休日			
金	7.30—9.00	訳読（ヴァジル）		
	11.00—13.00	現代外国語	10.00—13.00（5名）	10.00—11.00（2名）
	15.00—17.00	数学		15.00—16.30（3名）
	17.00—18.00	訳読		
土	7.30—9.00	訳読（ホーマー）		
	11.00—12.00	訳読（助教師担当）		12.00— 3.00（2名）
	半休日			

注，

以上の外にラテン語の作文，作詩，ギリシア語の作詩，英文の自由作文，個人指導用の課題が出される。

作文の個人指導は，30名のうち上位10名は週1回，校長が指導する。

残り20名のうち5名を週1回指導する。（月1回校長の指導を受ける）

校長付助教師はこの20名を週1回指導している。

校長は，火曜日（7.30—8.15）6年下級でアリストファネスを教える。

校長は，月・水・金の第3校時（数学の時間）下学年の各学級を巡回し，テストを実施する。学期間2回巡視する予定である。

6年上級の総時間数は22時間（神学2，訳読9，アリストファネス1，暗誦4，歴史1，数学3，現代外国語2）

引用　Report, vol, Ⅱ, P. 475

第5表

ブラッドビー古典助教師の週授業計画			(1861年7月29日)
		レムーブ学級(36名) 週授業計画表	個人指導週計画表 個人指導担当生徒 40 名
日	15.00—16.30	旧約聖書の歴史	
月	7.30— 9.00	ギリシア語聖書と聖書暗唱	
	9.30—10.30		作詩の訂正，レムーブ級 シェル級，4年級生徒　20名
	10.00—13.00	(フランス語)（3学級にわけ各1時間)	
	12.00—13.00		6年級，ホーマーのオディセーXⅢ，XⅣ　4名
	14.30—16.00	(数学)（2学級にわけ各1時間)	
	17.30—18.30	ホーマーのイリアッド	
火	7.30— 8.30	(数学)	5年級，ホーマー，40行，16名
	10.00—11.00		レムーブ級，シェル級14名
	11.00—13.00		レムーブ級，シェル級，4年級 作文，ラテン作詩　20名
水	7.30—9.00	ローマ史又はギリシア史 ギリシア文法　暗唱	
	10.00—11.00		レムーブ，シェル，4年級の一部 学校の課題準備　17名
	11.00—12.00	ユーリピデス(ギリシア悲劇詩人)	
	12.00—13.00	ラテン語作詩	
	15.30—16.30	ラテン語作文練習	
	17.30—18.30	ホーマー	
木	7.30—9.00	ホレース又はヴァージル講読	
	9.30—10.30		作詩の訂正，レムーブ級 シェル級，4年級　20名
	10.00—13.00	(フランス語)	
	12.00—13.00		6年級（月曜と同じ）　4名
金	7.30— 9.00	ローマ史又はギリシア史 ギリシア文法，暗唱	
	10.00—11.00	地　理	
	11.00—13.00		レムーブ級，シェル級，4年級

第5表の2

	15.30—16.30	キケロ	作文，ラテン語作詩　20名
	17.30—18.30	ユーリピデス	
土	7.30—9.00	ホレース又はヴァージル講読	
	10.00—11.00		レムーブ級，シェル級，4年級の一部学校の課題の準備　17名
	11.00—12.00	(数学)	
	12.00—13.00	ギリシア語文法練習	

聖　書	2	ラテン語作詩	4
ギリシア語講読	4	訂　正	2
ギリシア文法	2	個人指導講読	4
ラテン語講読	3	準　備	2
ラテン語作文	2	合　計	12時間
暗　唱	3		
(フランス語)	2		
(数　学)	3		
歴　史	2		
地　理	1		
合　計	24時間		

引用，Report，vol，Ⅱ，P．477，P．494

フランス語はフランス語教師，数学は数学教師が担当する。

第6表

新　創　立　学　校　一　覧

	学校数			
	A	B	C	計
1830—9	0	3	8	11
1840—9	9	15	1	25
1850—9	5	6	3	14
1860—9	10	14	2	26
1870—9	4	7	—	11
1880—9	5	10	—	15
1890—9	3	6	—	9
1900—9	1	3	—	4
1910—9	0	0	—	0
1920—9	3	3	—	6
1930—9	1	1	1	3
1940—9	0	0	—	0
1950—9	0	0	—	0
	41	68	15	124

注，T.W.Bamford：The Rise of the Public Schools，P 270

パブリック・スクール協会に属する学校のうち，寮生 200名以上の学校はA，以下の学校はB，その他の寮制の学校はC。

第7表

校長・教師の聖職位保持者 (1893年)				
	教師		校長	
	総数	聖職位保持者数	聖職位保持者数, 俗人	
寮制学校 ハロー外16校	492名	113名 (23%)	16名	0
通学制学校 セントポールズ校外6校	189名	26名 (14%)	1名	5名

T.W.Bamford : The Rise of the Pub lic Schools, P.56 の第3表から作成。

第8表

ハロー校寮生個人指導生徒数 (1861年平均)		
寮名	寮生	個人指導生徒
校長寮	63	—
ハリス寮	50	66
スチール〃	41	31
ヴォーン〃	38	43
レンダル〃	36	42
ミドルミスト寮 (数学)	35	—
ドルーリー寮	28	32
ブラッドビー寮	16	40
ハットン寮	11	16
ラールト寮 (現代外国語)	10	17
ワットソン寮 (数学)	8	22
ブル寮	7	7
ファーラー寮	7	37
ホームズ寮	7	35
ウェストコット寮	7	40
ワットソン寮	6	40
ヘーワード寮 (数学)	4	21
マッソン寮 (現代外国語)	3	—

Report, vol, Ⅱ, P. 285

第9表

7大校一覧表				
学名校	生徒数	寮生数	通学生数	年間学費ポンド
イートン・カレッジ	1,190	1,190	—	508
ラグビー・スクール	715	657	58	504
ハロー・スクール	653	653	—	498
ウィンチェスター・カレッジ	537	537	—	498
セント・ピータース・カレッジ (ウェストミンスター・スクール)	444	257	187	498
チャーター・ハウス	650	650	—	492
シェルースベリー・スクール	540	498	42	441

注, T.W.Bamford : The Rise of the Public Schools, 1967, .P 331
同書の注によれば1961—2年の数字である。

注

1. E.D.Laborde : Harrow School, 1948, P.46以下 Laborde と略す
2. F.D.How : Six Great Schoolmasters, 1904, P.143 以下 How と略す
3. 中川芳太郎：英文学風物誌, pp.110—1
4. Report of Her Majesty's Commissioners appointed to inquire into the Revenues and Management of certain Colleges and Schools, 1864,vol, Ⅱ, P.275以下 Report と略す。
5. Stanley's Life of Thomas Arnold, 1901, P.231以下 Stanley と略す。
6. How:P.139
7. 5に同じ
8. Stanley:pp.351—3
9. Ibid:P.368

10. Ibid:P.397
11. Ibid:pp.474—5
12. この Calling の意味はただ職業という意味だけではない。プロテスタント特有の考え方，感じ方に基づく使用法である。大塚久雄：宗教改革と近代社会，P.18「ドイツ語の Beruf や英語の Calling は周知のように『聖召』ということと『職業』ということとの二重の意味内容をもっているが，この語の中に含まれている世俗的職業こそ聖召に基づく使命なりという観念は，そもそも宗教改革を以て始まったプロテスタンティズム特有の倫理観念なのである。」
13. Stanley:pp.572—3
14. Ibid:P.574
15. Ibid:P.579
16. Ibid:P.579
17. Laborde:P.174
18. How:pp.140—1
19. Ibid:P.142
20. Ibid:P.144
21. Ibid:P.146
22. Laborde:P.52
23. ジョン・ロック：教育に関する考察（岩波文庫本），pp.213—4
24. 主の祈り，マタイ福音書6章9節—13節
26. 十誡，出エジプト記20章2節—17節
27. ジョン・ロック：pp.245—6
28. Report, vol, Ⅱ, P.282
29. Ibid:P.281
30. Ibid:P.282
31. Ibid:pp.475—9
32. 池田良三：イギリスの教育(6)第6表ハロー校学校関係支出明細表
Report, vol, Ⅱ, P.270
33. Report, vol, Ⅰ, P.227
34. Ibid:vol, Ⅱ, P.275
35. Ibid:vol, Ⅰ, P.108
36. Ibid:vol, Ⅱ, P.112
37. A.F.Leach:A History of Winchester College, 1899, P.410
38. Report, vol, Ⅱ, P186
39. Ibid:P.276
40. Ibid:P.277
41. Ibid:P.273
42. Ibid:P.274
43. Ibid:P.273
44. Ibid : P.275
45. Ibid : P.273

46. Laborde : P.44
47. 池田良三：イギリス教育の伝統と未来，帝国地方行政学会発行，P.130，P.210
48. イギリスの教育(6)ハロー校の勅許状第7条，P.30
49. Report, vol, Ⅱ, P.274
50. Laborde : P.64
51. Report, vol, Ⅱ, pp.274—6
52. Ibid:, vol, Ⅰ, P.225
53. イギリス教育の伝統と未来：P.152
54. Report, vol, Ⅱ, P.274
55. Ibid : P·477
56. Laborde : P.52
57. Report, vol, Ⅱ, P.477, P494
58. Ibid : P.284
59. Ibid : P.278
60. Ibid : P.278
61. Laborde : P.43
62. Christopher Hollis:Eton, 1960, P.188
63. Reprt, vol, Ⅱ, P.110
64. Ibid : P.299
65. Encyclopaedia Britannica, 21
66. Leach:A History of Winchester Co.,P.416
67. ヒルトン菊池訳：チップス先生さようなら（新潮文庫本），P.11
68. Report, vol, Ⅱ, P.278
69. Ibid:P.309（ラグビー校の部）
70. Ibid:P.273
71. Stanley : P.118
72. Report, vol, Ⅱ, P.475
73. Britannicu, 23
74. How : P.158
75. Ibid : P.161
76. Ibid:pp.159—160
77. Lester Smith : Education in Great Britain, 1960, P.143
78. T.W.Bamford:The Rise of the Public Schools, 1967, pp.331—5以下 Bamford と略す。
79. A.H.Todd : Charterhouse, 1905, pp.3—12
80. Laborde : P.35
81. Ibid : pp.177—180
82. Ibid:P.180
83. Ibid : pp.174—6
84. Ibid : pp.181—9
85. イギリスの教育 (6) P.13宗教改革以後の学校創立一覧
86. Bamford : P.54

87. Report, vol, Ⅰ, P.259
88. Ibid, vol, Ⅱ, P.274
89. Bamford : P.46
90. 小林珍雄：キリスト教百科辞典
91. Report, vol, Ⅰ, P.139
92. Stanley:P.386
93. 松田智雄：宗教改革, pp.196—208
94. Bamford : P.42
95. Ibid : P.22
96. Report, vol, Ⅱ pp.272—3
97. Ibid : P.284
98. Ibid : P.111
99. Ibid, vol, Ⅰ, P.262
100. Ibid : P.189
101. Britannica, 14
102. Ibid : 21
103. Ibid : 3
104. Ibid : 4
105. Report, vol, Ⅱ, P.279
106. Ibid : P.277
107. Ibid : P.280
108. Ibid : P.281
109. How:pp.146—7
110. Report, vol, Ⅱ, pp.280—1
111. How : pp.148—9
112. カント：実践理性批判（岩波文庫本）P.50
113. Report, vol, Ⅱ, P.281
114. Ibid : P.280
115. How : P.163
116. ニケア信条，ニケア公会議は第1回325年神の聖子（おんこ）は聖父（おんちち）と同質であることを議定し，ニケア信条を公布した。（キリスト教百科辞典）
117. T.W.Bamford : Thomas Arnold on Education, 1970, pp.68—72
118. Laborde : pp.90—99
119. Ibid : pp.99—101
120. How : pp.168—172
121. イギリスの教育(6)第6表P.27
122. Laborde : P.27
123. Ibid : P.37
124. Ibid : P.48
125. Report, vol, Ⅱ, pp.359—365
126. Ibid : P.273
127. Ibid : P.277
128. How : pp.173—180

あとがき

イギリスの教育、第7集 を漸く書き終った。今回はチャールス・ヴォーンの教育改革の実際を、出来るだけ具体的に、九州大学教育学部、比較教育文化研究施設秘蔵の「クラレンドン報告書」収録の資料に基づいて明らかにしてみた。

校長や助教師の週授業計画一覧表をはじめ、進級の速度を示す校長学級生徒名簿の入学年月と学級名一覧（第3表）。校長の個人指導とその時間、生徒の割り振り、他の学級への出張テスト（第4表）。

助教師の個人指導は、上学年では週一時間又は二時間と少ないのに、下学年では毎日特定時間に指導し、指導内容も曜日によって変っている。何と、心憎いまでの指導計画ではないか。実に教育する意欲にあふるる計画ではないか。

宗教教育についてはさらに計画的である。聖職位を持つ者を校長・助教師として多数採用し、彼等が寮教師をしている。「寮制の私立中等学校」は、寮生二百名以上を擁するもののみで二百校に達している。これらの学校にその子をおくる両親の願いは、今更私が申すまでもないことである。彼等がおかれている社会環境は実にきびしい。

さて、以上述べた重要な二点、学習指導と宗教教育に、ヴォーンがその持てる力を、彼の全創意と宗教的説得力を最高度に発揮し得た、その背後にあるものは何なのか。その第一は、ハロー校が一五七二年の勅許状で、従来の教会付属学校の地位から、即ち教会の支配から脱して、新しく独立自活の財団法人立学校に切換えられたことに遠因がある。その第二は、特定の個人にその持てる能力を最高度に発揮させる制度、即ち学習指導上、勤務上に何ら制限なく、教師としての全能力を教育経営に集中させ得る制度に、その近因があると私は考えている。

学校教育は国家社会がもつ機能の一つである。その機能を最高度に発揮させるかどうかは、その国家社会の綜合的判断によるものと考える。日本の社会は、社会機能の一つである生産活動においては、今や世界の覇者の一人であることは争えない事実であろう。教育活動面ではどうであろうか。日本社会がもつ総力を教育活動に投じ、教師たちはその持てる創意工夫する総力を、全力もって教育事業に投じ得る、体制が出来上っているや、否や。

次号は新しくカレッジに取り組みたいと考えています。既にイギリスの教育間(6)で、カレッジ付属学校の起源は、マーシァ王国のエドワード王（九〇一―二五在位）までさかのぼれるのではないかと書きましたが、これらのカレッジの創立と維持運営には、独自の立場があるものと考えられます。幸にして資料も少しずつ集まっています。

今後とも相変りなくご鞭撻賜わりますようお願い申し上げます。イギリスの教育については本集で七回目の発表であります。ここで今迄に発表してきたものを記しておきます。

イギリスの教育

		発表誌	発表年月
第1集	パブリック・スクール	イギリス教育の伝統と未来第2章	昭和 四二、七
第2集	エドワード・スリング		昭和 四三、四
第3集	無月謝学校の歴史	宮崎女子短大研究紀要 第2号	昭和 四四、八
第4集	イートン・カレッジ	イギリス教育の伝統と未来第1章	
		イギリス教育の伝統と未来第4章	昭和 四五、一〇
第5集	組合立学校の歴史	未刊	
第6集	ハロー・スクールの教育法 勅許状の研究	宮崎女子短大研究紀要 第3号	昭和 四七、二
第7集	ハロー・スクールの教育 チャールズ・ヴォーンの改革	宮崎女子短大研究紀要 第4号	昭和 四八、二

イギリス教育の伝統と未来　帝国地方行政学会発行　A5判三六〇頁、　価一、五〇〇円　昭和 四六、二

(昭和四八年二月一五日　宮崎女子短期大学講師
住所　〒八八〇　宮崎大和町一二九―二
電話〇九八五―二四―一八二六)